

アートカウンシル東京

谷中流

アート

マネジメント

——非合理で過剰——

谷中流アートマネジメント  
— 非合理で過剰 —

アーツカウンシル東京

## はじめに

2009年から2013年にかけて、谷中界わいにて夢か現実か分からなくなるような謎めいた風景に遭遇したことがあるならば、それは「ぐるぐるヤミ」プロジェクト（以下「ぐるヤミ」）だったかもしれない。ぐるヤミとは、東京アートポイント計画として、〈谷中のおかつて〉（以下「おかつて」と東京都、東京文化発信プロジェクト室（現アーツカウンシル東京）が街に仕掛けたアートプロジェクトである。「芸術っ子」と呼ばれる若き表現者たちが繰り広げる「谷中妄想ツアー!!」が象徴的なプログラムだが、全体としては根津や上野桜木に位置する3拠点の形成と、5種のメインプログラム、そして多数の派生企画等が緩やかに連動しながら展開し、参加者は4400人以上に及ぶ。2014年以降もおかつての自主事業として、ぐるヤミから発展した大小さまざまな企画が動いている。

2009年に始動した東京アートポイント計画は、地域社会を担うNPOとアートプロジェクトを展開することで無数の「アートポイント（文化創造拠点）」を生み出す東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京による事業だ。<sup>2</sup>

「文化事業は、まいた種が実を結ぶまで最低10年はかかる」という実感に伴う経験を経て、2019年度には『これからの文化を「10年単位」で語るために―東京アートポイント計画2009・2018―』を発行し、過去10年の活動を振り返るとともに、次の10年の構想に取り組み始めた。本書ではその一環として、ぐるヤミにおけるアートマネジメント

に注目しつつ、その活動を掘り下げていく。

2010年に財団に入団した私が、プログラムオフィサー1年目として最初に担当したアートポイント事業の一つが、ぐるヤミだった。この10年で最も先が読めず（いい意味で）、説明が難しく、いろんな意味でドキドキさせてくれた事業だったといえる。プロ・アマ問わず、プロジェクトに集う一人ひとりにとって必要な表現や技を追求し、既存の概念や枠組みを超えた「アート」や「アートマネジメント」を生み出そうと、言語化未満の状況や出来事とことん向き合いながら試行錯誤を続けたぐるヤミだからだろう。新人として経験の浅かった私は、「概念が新し過ぎてよく分からない」ということもあったし、おかつて自身も手探りで進んでいたため、なおさら事態は複雑だったが、皆で前向きに「分からないけどやってみよう!」を重ねた結果、分からないものを分からないまま受け入れる耐性が強化されていったように思う。それは実験性の高い文化事業において、非常に重要なスキルの一つではないだろうか。確実な手掛かりはないけれど、新しい何かと出会えるかもしれないという予兆や匂い、感覚的なものを大事にするマネジメントがおかつては得意だった。

ぐるヤミの活動は日常に溶け込み過ぎていて非常に捉えづらい。拠点「はっち」に集う人々は、何をするでもなくのんびりしたり、おかつてに悩み相談を持ち掛けたり、その時

気になっていることを話したり、ただお茶をして帰っていったりする。表立ってイベントをしない時の方が、どんな人がやって来るのだそう。出入り自由で、目的なく集え、立場や肩書きは不要。役割を振られることもなく、個人としてそれぞれの姿が心地よい形で過ごせる場。そうなることを意図して、絶妙な空間づくりや雰囲気づくり、訪問者との距離感を設計していたおかつては、毎日のように「はっち」を開いた。そこには日常に満足していないアーティストの卵や、アートに希望を求める社会人たちの姿があった。『芸術の付近』に集い、斬新で面白い何かを仕掛けたいけれど、やりたいことをうまく言葉にできない。そんな未熟な状態に親しみを込めて、富塚絵美（おかつて総合ディレクター）は彼らを「芸術っ子」と名付けたという。そうした拠点の活動の先に「谷中妄想ツアー!!」や「ぐるぐるミックス」といった企画が形になっていった。また、ぐるやミは、さまざまな表現者が作品制作とマネジメントの境界を行ったり来たりしながら、それぞれの在り方を更新することに挑戦する場だった。芸術っ子にとっては、そのような環境で思い思いのアートを互いに受け入れながら、生きる上で自分らしく表現する自信を養う場にもなっていた。

おかつていわく「ぐるぐるしている人」（内発的な衝動に駆られてあてもなく思考し続ける人）は不思議な魅力を帯びた何らかのエネルギーを放っており、拠点で一緒に過ごしているとそうしたエネルギーを感じ取れるようになるらしい。その「ぐるぐる」はいつしか周囲の芸

術っ子に連鎖し、ぐるぐるに反応した人々（「ヤミ」）が動き出すことで新たな表現が生まれていくのだそう。『ぐるぐる』することに素直に反応し、あてどもなく「ぐるぐる」し続けるもよし。そうした状況を愉しむことがぐるやミ的な表現の原動力だ。おかつては、芸術っ子に積極的に介入するでもなく、いつ起こるか分からない「ぐるぐる」と「ヤミ」の連鎖反応を期待しながら待つ。力技ではなく、自然発生的に、奇跡のように出来事が生まれていくのを待つのも、おかつてならでは。そんな気の遠くなるような環境づくりが、おかつての表現の芽を育てていった。

ぐるやミの5年間は何を生み出したのか。本書の制作に当たり、立ち上げから10余年の歳月を経た今あらためてプロジェクトを俯瞰してみることで、関係者の当時の思いや狙いについて言語化を試みた。

坂本有理（東京アートポイント計画プログラムオフィサー）

- 1 アートプロジェクトが継続的に動いている場であり、その活動をつくる人々が創造的に集まる拠点のこと。単に場所を指しているのではなく、アーティスト、運営スタッフ、ボランティア、その場を楽しむ来訪者も含めて「アートポイント」を形成すると捉えている。
- 2 2015年以前は東京文化発信プロジェクト室。

はじめに.....

02

谷中で何が起こったのか？.....

08

3人のキーパーソンにインタビュー

谷中のおかって代表&ぐるヤミ事務局長.....

17

渡邊梨恵子

おかつての助走は取手のTAP塾

谷中のおかって立ち上げに参加

自分たちの拠点を持つ

アートポイント計画共催終了後は自立運営

続けないと見えない風景

パフォーマンスを追求するおかつて総合ディレクター..... 33

富塚絵美

魔女の格好でかき氷を売る少女

発想を支えるたくさんさんの学び

熊倉純子と出会い「谷中妄想ツアー!!」が生まれる

『妄想』とは、誤読を許容するマジックワードである

奇跡を生んだ呪文「ぐるぐるヤミ↓プロジェクト」

アートマネジメントの現場と人材を育成した教育者..... 53

熊倉純子

「藝大のため」のアートプロジェクト

「市民参加型」のプロジェクトに！

谷中のおかつて発足！

谷中の土壌..... 68

活動のきろく..... 78

あとがき..... 92



# 谷中で何が起こったのか？

2009年10月4日、東京都台東区谷中界わい。

それまで、街中を巡っていた「谷中妄想ツアー!!」の参加者たちは、不思議な感覚に陥りながらゴール地点に向かっていった。

東京藝大の学生をはじめとする若き表現者たちが

谷中の街中に仕掛けた参加型パフォーマンスプログラムは、

一般参加者70人に対し、80人ものスタッフという

規格外のスケールに膨らんでいた。

この奇跡の企画はどのように生まれたのか？

2009年に誕生した「谷中妄想ツアー!!」は、〈谷中のおかって〉が30人程の表現者たちと谷中の街を舞台に繰り広げたツアー形式のパフォーマンス企画だ。〈谷中のおかって〉という組織は、東京藝大の学生や社会人メンバーによって運営されている。2009年当時の主な運営メンバーは10人弱だったが、それぞれに明確な役割が与えられていたわけではなく「全員がプロデューサー」という位置付けで企画・運営会議が行われていたという。150人規模のパフォーマンスプログラム「谷中妄想ツアー!!」がどのように運営されていたのか、仕組みを見てみよう。

## 形のないアートのマネジメント

企画会議でまず決められたのは、開催する日取りだった。「お散歩しながら楽しむアートプロジェクトなので、気候のいい秋に」。そして当時、アートプロジェクトを先駆けて行っていた「art-link上野―谷中」(以下「art-link」)の会期に合わせて実施することになった。次にパフォーマンスを行う場所の交渉。この企画の特徴は、本番当日アーティストがどんなパフォーマンスをするかは問わないこと。テーマを設定せず、それぞれが自由にパフォーマンスを披露するという漠然としたアイデアを形にしていかなければならず、何をす

るか分からない中で、パフォーマンス地点となる18カ所の店舗や民家のあるじと交渉していたのだ。それを可能にしたのは、谷中の街を舞台に毎年行われていた「芸工展」<sup>2</sup>やart-linkに地域住民が慣れ親しんできた土地柄と、交渉術を持たない学生たちの情熱だった。パフォーマンスを行うアーティストたちの集め方は、おかってメンバーが知人に声を掛けていくというスタイル。「経費は出すけど、ギャラはなし」という条件で、何をやってもいいがやりたいことだけに限るという話だった。そうして、谷中エリアに設定されていた18カ所のパフォーマンス地点は、民家の縁側や客間、店の軒先など……。これらの場所やパフォーマンス、誰がどこで何をするのかは事前に明らかにされていない、ミステリーツアーのような不思議な企画となった。しかも、開催当日に参加者へ渡されたのは布にマジックで手描きされた地図のみだった。もちろん、事故などを防ぐためのリスクマネジメントは必要となる。当日に備え、ボランティアスタッフの数は膨らんでいった。

- 1 1997年から続く、美術館や博物館が集まる上野公園と、隣接する谷中、根津、千駄木のギャラリーなどをアートでつなぐイベント。毎年、有志が実行委員会を運営。
- 2 「まちじゅうが展覧会場」をキーワードに、さまざまな職人やアーティストが軒を連ねるイベント。

開催当日、16組（4人1組）の参加者グループが布に描きされた地図の目印を頼りに、それぞれ異なるルートで幾つかの地点を通り、パフォーマンスに出会うという仕組み。パフォーマンス地点では、次の地点までの地図をその場で描き足してもらい、それを4回ほど繰り返すとゴール地点にたどり着く。最後は同じゴール地点に集うが、1グループにつき4カ所しか見ることができない。



半径約500m圏内の18カ所でスタンバイしているパフォーマンスのほか、路上に突然出現するアーティスト（おかつてメンバーも把握していない）もいた。個人宅の一室に案内されたり細い路地を抜けたり、2~3時間不思議の国に迷い込むような体験になる。不自然な動きだが散歩客のようにも見えるパフォーマンスがいたり、運営側のスタッフがあえて通りすがりのフリをして紛れ込んでいたりするので、どこまでが仕掛けで、どこからが街の日常なのかの見分けがつかない。



東京文化発信プロジェクト  
東京から生まれる新しい文化の波

東京文化発信プロジェクトは、東京ならではの芸術文化の創造・発信と、芸術文化を通じた子供たちの育成を目的として、東京都と東京都歴史文化財団がアートに関わる様々な団体と協力して実施しているプロジェクトです。様々な芸術分野のイベントや、まちなかで市民とアーティストが協働するアートプログラム、子供向けの体験型プログラムなどを展開しています。



谷中という魅力的なまちに魅了され、身体に書き起こる「ぐるぐる」。  
そのエネルギーに反応し動き出す「ヤミー」たち。「ぐるぐる」と「ヤミー」が組み合い、  
谷中のあちこちでさまざまな出来事を繰り広げる。それが「ぐるぐるヤミープロジェクト」。  
今回は、パフォーマンスツアー「谷中妄想ツアー!!」、トークイベント「谷中放談」、  
ライブイベント「LOVE!LIVE」、特別公演「鬼音祭り」の4企画を実施します。

<各イベントのご予約は下記アドレスにて9月14日より受付開始>

<http://guruyami.web.fc2.com>

お問い合わせ 080-3709-8349 (谷中のおかつて)

<プロジェクト1>

## 谷中妄想ツアー!!

10月4日(日)、10日(土) 15時30分～

谷中に惹きつけられた若い芸術っ子たちが繰り広げる参加型パフォーマンスツアー。彼らの妄想があたの手の上に現る未来の痕跡とは？

■集合場所：アートリンク谷中ベース（次回マップ②参照）■所要時間：約2時間程度 ■料金：1000円 ■定員：各回50名（要予約）

【主・出演】大西雄太郎（ダンサー） 島々木友輔（映像作家） 大久保由美（ダンサー） 船越美千代（美術作家） 松岡美奈子（音楽家） 宮澤健乃香（美術作家） 浅野薫子（ダンサー） 中野裕（占い師）  
渡部仁美（ストーリーテラー） 大西香織（ギター・パフォーマンス） 松島有希菜（美術作家） 夏花乃季（ダンサー） 竹村香葉（歌手） 石谷浩次（デザイナー） BarbaraDarling（演出家） 他  
【企画・構成】宮澤健太郎 【企画制作】谷中のおかつて

【チラシ】開催日時とスタート地点、問い合わせ先など、最低限の情報だけが記載された。企画を仕込んだ約1年間、表現者を集め、街中の会場を交渉し、ボランティアスタッフを募り、チラシを作成し……と、段取りだけを追えばよくある街中のアートプロジェクトのマネジメントのようにも思えるが、何が起こるか分からない本番に、柔軟な対応がとれるよう準備が進められた。

「谷中妄想ツアー!!」は企画の準備段階でボランティアスタッフがどんどん増え、さらに、当初声を掛けていた30人のアーティストからの口コミでパフォーマーも増えていった。結果として、参加者約70人に対し、パフォーマーとボランティアを合わせて総勢80人もがスタッフとしてもてなした。

何をするかも分からず会場交渉を始める。参加者は「ツアー有り☑」とだけ書かれた張り紙に引かれて集まってくる……。謎めいていて、本当にそれがマネジメントなのかと疑いたくなるようなことばかりだ。しかし、それはおかつてが実現したい「アート」についての近道だったのだ。

参加者が街中で出会ったパフォーマーは、街の日常に溶け込んでいるのに、普通に考えたら起こり得ない奇妙キテレツな風景だった。それを幾つも繰り返し目撃させられる。目撃するその風景には、妙な説得力と奥行き、強烈なインパクト、そして10年経っても昨日のこつのように鮮明によみがえってくる特殊な濃度があった。

## 文化事業の現場は、一朝一夕に生まれるものではない

例に挙げた「谷中妄想ツアー!!」は氷山の一角であって、それは偶然に生まれたもので

はない出来事だった。おかつてメンバーたちが目指していたのは「文化的創造拠点」をつくること。「芸術っ子」たちが、アートや表現の在り方を模索する中で、社会との接点を創出していくことだった。

彼らはそのプロジェクトを「ぐるぐるヤミ↓プロジェクト」と名付けた。人々のエネルギーを「ぐるぐる」という言葉で表現し、10年以上にわたりアートプロジェクトを続けてきたが、そもそもプロジェクトの設計思想が従来型ではない。「作品」の背景にある表現欲求そのものに着目したおかつてだからできた試みだったといえる。

おかつては継続した実践を通じ、アートプロジェクトが結実するには10年の時間を要することを示し、その重要性を表現してきた。

この10余年を語る上での主要な登場人物としては、おかつて代表の渡邊梨恵子、「谷中妄想ツアー!!」を誕生させた富塚絵美、そして彼らを教育者として見守り、支援してきた熊倉純子の3人が挙げられる。

おかつての事業に関しては、既に複数の冊子で紹介され、団体のホームページの「沿革」「事業」からも閲覧可能であることから、本書では〈谷中のおかつて〉を誕生させた3人に焦点を当て、文化事業の担い手として形成されていく過程を、それぞれの視点から語ってもらうヒアリングを行った。

どのような経緯でプロジェクトを構想し、何を実現しようとしていたのか、三者によって語られる活動の軌跡は文化事業が要するマネジメント人材の育成について考察するための、一つの参考事例となるだろう。

以降の記事「3人のキーパーソンにインタビュー」における聞き手は、東京アートポイント計画ディレクターの森司が務めた。

### 3人のキーパーソンにインタビュー

## 谷中のおかって代表& ぐるヤミ事務局長

### 渡邊梨恵子

大学時代にアートプロジェクトに出会い、谷中の地でおかって代表を務めることになった渡邊梨恵子さん。

「会期」という短いスパンでの出会いではなく

「数年先」の時間軸で社会とのつながりを捉えてきたのは、

当初「何者なのか」と不審がられたおかって立ち上げ期から拠点を持つことによって生まれた考え方だという。

〈谷中のおかって〉代表に聞く、運営の10余年。

わたなべ・りえこ

2008年日本大学理工学部建築学科卒業。2010年より一般社団法人 谷中のおかっての代表を務める。台東区谷中を中心に学生や社会人メンバーと協働しアートプロジェクトを展開。「ぐるぐるヤミプロジェクト」(2009-13年)を実施。こども創作教室「ぐるぐるミックス」(2011年-現在)や、Art Support Tohoku-Tokyo (東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業/ASTT)で岩手県釜石市における「ぐるぐるミックスin釜石」の運営・コーディネートに携わっている。2016年より上野文化の杜新構想実行委員会の事務局スタッフも務める。



# 拠点づくりから始まる、 街と人とアートの接点

——〈谷中のおかつて〉は10年経って自立運営できるようになったという意味で、重要な成功事例です。アートマネジメントに興味を持たれたきっかけは何でしたか。

## おかつての助走は取手のTAP塾

2005年のTAP塾<sup>3</sup>がきっかけでした。同じ日本大学の建築学科の同級生に誘われて、アートマネジメントという言葉自体もまだよく分かっていなかったんですが、どんなことをやるんだろうと興味を持って通い始めました。友人とは興味のあるアーティストや展覧会などについてよく話す仲だったから、アートに関心のある者同士ということで誘ってくれたようです。

当時、講師をされていた森さんと何をどう話していいのかも分からなかったし、森さん

と塾長の熊倉さんが何のことを言っているのかも分からないまま、メモをとっているような感じでした。でもそれが面白かった。謎だらけで。

それにTAP塾には、藝大生やほかの大学生、社会人、専門家やアーティストも集まっていました。大学に通っているだけでは出会うことがないような、まったく接点のない人たちと一緒に何かをやるという状況を面白く感じていたんです。私自身が田舎から東京に出て来てから、大学とアパートの行き来だけで出会う人が限られていたことに窮屈さを感じていたのもあると思います。TAP塾生の中には、取手に移り住む人もいました。地域の人とよそから来た若者、アーティストなど、人と人の関係性の広がりやつながりが生まれていく状況を体験させてもらいました。

3 茨城県取手市で展開された「取手アートプロジェクト（TAP）」が主催するアートマネジメントの人材育成講座。熊倉純子が塾長を、森司が講師を務めた（2004―06年）。

——それまでアートプロジェクトに携ったことはあったのですか？

デザイン系のイベントのアルバイトをしたことぐらいです。TAPは見本市的な一過性のイベントとも違いましたし、本で読んだ川俣正さんなどアーティストが手掛けるアートプロジェクトとも違う印象を受けました。アーティストランでもトップダウンでもなく、

市民運営を軸とし、さらに企画運営のコアな部分にTAP塾生がタッチできる間口が大きく開かれていました。専門家でもなければ、なんの実績もない学生の私にとっては、上京して初めて社会に参加している感覚を得ることができた場でした。

2005年当時のTAPは、取手駅前のショッピングプラザ内の一室を事務所として借り、同じ建物内にサテライトギャラリーを設けていました。この年は、地元のアーティストのアトリエを巡る企画や、商店街や旧茨城県学生寮の建物とそれに隣接する「原っぱ」を活用した企画、アーティストを小学校に派遣する企画などを展開していました。これらを実現するために、膨大な議論がなされていました。プロジェクトが佳境の際には、アーティストや塾生を自宅に泊めてくれる市民の方もいました。翌年には取手に移り住んだ塾生がシェアハウスを始め、「TAPハウス」が誕生。会議の中だけでは話しきれない相談、アーティストとの交流や、塾生同士のアート談義などが繰り広げられていました。こういった場によって、プロジェクトの根底を支える関係性や考え方に強度と深みが増していたのではないかと思います。アートプロジェクトにおける「拠点」の重要性も、TAPの経験から得られた視点でした。

## 谷中のおかって立ち上げに参加

—— おかつては谷中が拠点になりますね。

そもそもTAP塾の塾長だった熊倉さんや、塾生として一緒だった田尻さんが谷中を気に入っていたので「この辺りでプロジェクトをやりたい」という話になっていたそうなんです。熊倉さんは、谷中では行政や公的なお金を入れずに手弁当でプロジェクトを立ち上げてみようと考えていたようです。それまで手掛けてきたプロジェクトは、行政や公的機関も関わっていたから関係者も多く、補助金などの紐付きの予算で運営されていたので、ある種の不自由さみたいなものもあったのではないのでしょうか。

そのような流れの中で〈谷中のおかつて〉が生まれました。2008年ですね。田尻さんが、おかつての活動資金調達のための助成金申請書を作成するのに「パソコンを貸してくれ」って、うちへやって来た時にプロジェクトの話をされて、私も誘われたんです。この年は印刷会社に就職したので、2年間は働きながら関わることになります。

私自身は「社会人生活とアートプロジェクトの両方を面白がることは可能か？」という、自分的に実験のようなことをしていた時期。印刷会社に就職したのも、アートの現場に印刷知識が役立つんじゃないかと考えてのことでした。

——2008年の〈谷中のおかって〉では、具体的にはどんな活動を？

2008年は本当に手弁当でした。東京藝大の熊倉純子研究室（以下「熊倉研」）のゼミ活動の一環としておかつての活動が始まって、私のような有志の社会人もそこに参加していました。

谷中には1997年から続いている「art-link 上野―谷中」というプロジェクトがあつて、2008年当時は地域の美術館やギャラリーなどを紹介するマップをつくって秋のイベント会期に合わせて配布し、アート作品を見て回る枠組みを残していました。その会期中のインフォメーションセンターの運営を、私たちが買って出ました。

おかつては「アートよろず相談」を掲げていたので、その存在を知ってもらうためにも、日本のアートプロジェクトの先駆けであり、アートシーンでの知名度も高いart-linkの軒先を借りて活動を始めます。当時、大学院1年生で熊倉研に所属していた富塚と出会ったのもこの年です。

——2009年からは、アーツカウンシル東京の前身の東京文化発信プロジェクト室が共催事業として関わります。

そうですね。おかつては2009年に「学生とアーティストによるアート交流プログラム（大学連携事業）」の枠組みでお世話になっています。この年に「ぐるぐるヤ↓ミ↓プロジ

エクト」というプロジェクト名や「谷中妄想ツアー!!」が誕生しました。

——渡邊さんは2010年の法人化の際に、代表を頼まれたのですか？

2010年の春、私は2年間働いた印刷会社を辞め、料理の専門学校にでも行って手に職を付け、カフェでも開こうかとぼんやり考えていたタイミングでした。一方、おかつては活動を継続していくために法人化しようというタイミングでした。実際、時間的に法人化に向けて動けるメンバーは私と富塚ぐらいだったので、「二人でやるかー」って。法人化した年から「ぐるぐるヤ↓ミ↓プロジェクト」をアートポイント事業としてやらせていただけることになり、再就職や専門学校に行くという道はいったん捨て、おかつての活動を自分の仕事の軸にして挑戦してみようと思いました。

## 自分たちの拠点を持つ

アートポイント事業が画期的だったのは、共催という形で現場に自由度があったことです。事務局側がやりたいことをやっていくためのキャリアを積む機会になりました。特に大きかったのは、一般的な助成金では経費として認められにくい事務局運営のためのお金が使えるようになったこと。かつ、谷中に拠点を持てたこと。それまでは間借りしたり、

公民館に集まったりしていました。2008―09年までは、ある種、よそ者としていられましたが、拠点を持ちながら地域に関わるとなると、できることの可能性が広がる一方、プレッシャーも感じました。谷中周辺は、本気で文化のことをやる人は応援してくれる街ですが、常に本気度を試される場もありました。拠点を持つことで、一過性のイベントではなく、継続を視野に入れた活動であることのアピールにもなりました。

——はつきり拠点を持ちたいと言われたのはおかつてが初めてでした。

当時、住んでいた調布市から、ほぼ毎日、拠点「はっち」に通いました。用がない時も地域の人と顔を合わせることが必要だと思って。最初は、アートポイントを始める中で、本格的にどんなことをやりたいか富塚と話したり、彼女が藝大に入る前のバックグラウンドを共有したり、お互いの価値観などをあらためて知るところから始めました。そして徐々に、仲間内での密かな交流拠点にもなっていったんです。さらに地域の人が混じり合い、とにかく来る人は拒まずに迎え入れ、ひたすら話をしていった感じです。公のお金を使っているのだから「公共性を持つ場所として、どなたでも歓迎する」ことを意識していました。まさに「よろず相談所」と言っていいたいような空間だった。

不特定多数が出入りするのには大家さんからすると不安だと思って、最初は何に使うか聞かれても言葉を濁していました。家賃は毎月手渡しで、ついでに立ち話をするようにして

いました。駅に近かったから藝大生がどこからか噂を聞いて寄ってくれたり、そこからプロジェクトに関わる人が現れたり、私塾みたいな活動が生まれたり。拠点があることで、いろんなことが広がりました。

これもまた重要な拠点になるのですが、彫刻家・平櫛田中のアトリエ兼住居だった旧平櫛田中邸に富塚が惚れ込んで、建物を管理していた「NPO法人たいとう歴史都市研究会」からソフト面の運営をおかつてに任せていただけることになりました。いろんな若い芸術家の育成や発展に貢献したいという志をくみ取ってくれたんです。そのNPOと一緒に活用プログラムを考えたり、実施したりするようになります。それを得たのも大きかったです。

——大きいというのは？

おかつてが拠点としていた「はっち」は、狭さなど建物の特性的に少人数で密な関係を築くのにはよかったんです。でも田中邸は、文化的背景を含めたパブリックな展開ができるという点ですね。事業の種類や幅、もちろん物理的にも広がった。そこで月に一回のお掃除会を始めます。地味ですが、午前中に掃除したら、午後は自由に過ごす「田中邸を味わう日」というのを設けました。かなり緩やかな時間を過ごせる一番贅沢な企画です。古い建物に関心ある人や、お掃除したい人が来るようになりました。

同時におかつての拠点「はっち」でも公開日を設定して、複数の拠点が連動することで文化が育つ環境をつくろうとしていました。「谷中妄想ツアー!!」の実施にも幾つかの拠点は必要でしたから。拠点運営と企画の実施運営を通じて、アーティストの育つ環境づくりとアートマネジメントの人材育成の両方の試みを集約していった感じです。

## アートポイント計画共催終了後は自立運営

——東京アートポイント計画としての共催は2013年度まででしたね。

そうですね。2014年度はこども創作教室「ぐるぐるミックス」だけ共催、その後は自立運営です。こども創作教室「ぐるぐるミックス」は2015年度に東京芸術文化創造発信助成の単年度助成を受けていますが、翌年度からは公的資金や助成金を入れず、参加費で継続的に続けています。

アートポイントではないアーツカウンシル東京の事業もありました。ピクニック形式のパフォーマンス公演「威風DoDo」(※78ページ参照)がその一つ。隅田川沿いの公園という谷中から完全に離れた場所に、自分たちのプロジェクトの仕組みを持つていくことができました。何のネットワークもない場所、かつ限られた時間で、地域と関わる企画を実現する

ため、南千住のお祭りに参加させてもらい、逆にこちらのイベントにも参加してもらうという流れをつくりました。

——「威風DoDo」をやってみて手応えはありましたか？ ほかも谷中以外の地域でプログラムを展開されていますよね。

これまでの経験や手法の一つのパッケージとして仕掛けることができた実感がありました。「威風DoDo」以外にも谷中で2010年から実施している、きむらとしろうじんじんさんの「野点」を、Art Support Tohoku-Tokyo事業の一環として2012年から岩手県で展開し、その流れで「ぐるぐるミックス」を金石のこども園にインストールする取り組みも行っています。

また、メンバー個人の活動としても、富塚はTURNプロジェクトが始まった2015年からアーティストとして呼ばれているし、京都市京セラ美術館のラーニング・キュレーターとしての仕事にも取り組んでいます。私は2016年から、上野文化の杜で事務局スタッフの仕事もしています。それぞれの活動があり、おかつてでも活動している状況です。私が上野の博物館や美術館と地域が連携する上野文化の杜の事務局を手伝うことになったのも、おかつての活動があったからです。施設と地域との連携をうたっているのです、地域とのネットワークがあるということと呼んでもいいました。いろんな文化施設や、東京

都や台東区などの行政も入ったすごく大きな組織なので、おかつてのようにみんなで話してすぐ動けない難しさもありましたが、おかつての経験と地域とのネットワークをいかして実現できたプロジェクトもありました。2018年度は、京成電鉄の駅舎「旧博物館動物園駅」を舞台とした企画や、谷中の路地を一日歩行者天国にした企画、谷中解放区「柏湯通り」を実施し、再び「art-link 上野ー谷中」運営チームの皆さんと一緒に取り組むことができました。ほかに「NPO法人たいとう歴史都市研究会」が維持管理している谷中エリアの建物を活用したアートプログラムも展開しました。

4 2011年7月に開始した、東京都とアーツカウンシル東京の共催による芸術文化を活用した被災地支援事業。現地のアートNPO等の団体やコーディネーターと連携し、地域の多様な文化環境を支援する。

5 東京2020オリンピック・パラリンピックに関連した都のリーディングプロジェクトの一つである、社会／文化的背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を生み出すアートプロジェクトの総称。

6 上野文化の杜新構想実行委員会による、文化資源の宝庫である上野の潜在能力を発展させるためのプログラム。文化庁が提唱し、東京都、台東区等と連携して事業を推進。

## 続けないと見えない風景

——渡邊さんがつくり上げているマネジメントは、管理でも放置でもない手つき。そこが面白さなのかなど。生態系のような動ける環境をいかにつくるかという。

おっしゃる部分は面白くて、あとはそれを続けるとどんなことが起きるのかという興味があります。おかつては2009年の「谷中妄想ツアー!!」以降、解散などの道もあったと思いますが、続けていなければ見えない風景もあります。まいた種がどんな花になるか、時間や手間暇をかけないと分かりません。今は、富塚も私もそれぞれがおかつての活動と並行してアーティストやマネジメントの活動に取り組んでいるので、お互いが経験してきたことを谷中に持ち帰り、また新たな企画を考えたり、更新したりしています。そういう風通しのよさや、いろんな種が舞い込んでくる状況を保つことは、重要だと考えています。熊倉研の学生メンバーも毎年新たな風を吹き込んでくれています。一つの絵に固定しきれない、生態系みたいなものをずっと見ていられる贅沢感があるんです。

——それを維持するために何か自分に課していることがあるのですか？

自分の判断基準や見える範囲だけで決め付けないことでしょうか。人を排除せずにいかし続けることを一番に考えているかもしれないです。

当初から模索していたアーティストとの関わり方もそうです。アーティストが何をモチベーションに表現活動をしているのか、何を大事に思っているのか、その人の魅力は何か、傍らにいないければ分からないことも、拠点があって一緒に過ごす時間が多いからこそ見えてくる部分だと思います。

——そこはヒューマンインターフェースとしてのマネジメント技術がないとできませんね。単にスキル論ではないところが大きいと思うのですが、マネジメント技術が身に付いたという実感は？

アーティストだけでなく、一般公募のボランティアスタッフや出演者との距離感に悩んだこともありましたが、プライベートと地続きな部分の距離感は経験を重ねることで見えてきた気がします。大小の企画を手掛け、それぞれのやり口を踏まえてどう一緒に現場をやるのか、ちよつと距離を置いて眺められるようになりました。人がやりたいことを捉える速度も鍛えられましたが、経験の中でしかつかめていない部分がほとんどですね。

事務局の運営のことも当初は混乱していました。事業計画を書くのも初めてで、アートポイントのプログラムオフィサーで担当してくれていた坂本さんには、迷惑も掛けたり本当にお世話になりました。事務局としての働きを現場運営にどうつなげていいか、言葉の選び方や振る舞いも、周りのおかげで少しずつ分かっていった感じです。

——最後に、今のコロナ禍で活動をどうプロデュースするかということも聞かせてください。

経済や置かれている状況に飲み込まれないような、個人の精神的豊かさの軸が必要だと思っています。経済的な社会の落ち込みに比例して、個人の楽しみや喜びがなくなってしまうのは寂しいことです。自身の社会人経験でも、勤めていた会社がリーマンショック後にどんどんリストラを始めて、残った人も不安とストレスを抱えていました。気を紛らわすためにお金を払って娯楽を買うこと以外に、なかなか喜びを見つけられない、けれどお金もない……そんなジレンマに陥っている人が多いと感じていたんです。

コロナ禍という、これまでの社会のシステムが崩れてきている状況にあっても、個人の精神的豊かさは本質的にはそれと連動するものではないと思っています。これまで、消費経済に多くの喜びや楽しみを投影してきてしまった私たちには、個人的な豊かさの軸を持つトレーニングが必要で、おかつての活動にはそういった部分に作用する可能性があると思っています。例えば「ぐるぐるミックス」では、こども、スタッフ、アーティストたちは、お互いに関わりながらそれぞれが自分なりの楽しみ方を見つけ、変化していくことに興味を持ってやってきました。コロナ禍でスタートしたりリモート版「ぐるぐるミックス」においてもその点は変わりません。

アートプロジェクトは、美術館やギャラリーで作品を見るのとは違う、同時代を生きる生身のアーティストと出会うことができる場です。そのことを最大限にいかせる現場を、これからもつくっていききたいですね。アートプロジェクトは、個々の日常に変化をもたらすきっかけになると思っています。価値が定まっていけない中で、お互いに価値を見つけていく経験もまた、アートプロジェクトの中で育まれていくものだと思っています。

### 3人のキーパーソンにインタビュー

## パフォーマンスを追求する おかつて総合ディレクター

### 富塚絵美

〈谷中のおかつて〉が仕掛けていたのは、文化創造拠点をつくるためのプロジェクトだった!?

80人に及ぶ「芸術っ子」をプロデュースし、

「谷中妄想ツアー!!」という

摩訶不思議な企画をつくった富塚さんに、

その発想はどこから来て、

どこに向かうものだったのかお聞きした。

とみづか・えみ

アートディレクター、演出・振付、パフォーマーなどさまざまな分野で活躍。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科を卒業後、同大学大学院音楽文化学専攻芸術環境創造領域を修了。修了制作作品「谷中妄想ツアー!!」を契機に東京都と東京文化発信プロジェクト室と共に「ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト」を企画・運営。2009年から現在まで〈谷中のおかつて〉総合ディレクターを務める。2019年より東京藝術大学キャリア支援室特任助教、京都市京セラ美術館事業企画推進室ラーニング・キュレーター。



# こども時代から培ってきた プロデュース力

——「谷中妄想ツアー!!」は衝撃的でした。あの時味わった複雑で<sup>そ</sup>咀しゃくが難しい感じが、今日のインタビューで解消できることを楽しみにしています。あの企画をどのようにして誕生させたのか、富塚さん流の発想につながるルーツからお聞きしたいと思います。

## 魔女の格好でかき氷を売る少女

——早速ですが、どんなこども時代だったのでしょうか？

慶応元年に創業した豆腐屋の次女として生まれ、幼い頃から商工会の大人に混ざってお祭りに参加していたんです。お祭りのたびに、どんな出し物をしようか、どんな衣装で何を売ろうか、どんな看板をつくらうか考えていました。魔女の格好をして、豚汁やかき氷を売ってお小遣いを稼いでは、手伝ってくれた友達にバイト代を払う。時には駅前で歌や

寸劇を披露することを繰り返していました。幼稚園でもお昼寝の時間に「寝たフリをするけど、寝てはいけないゲーム」をはやらせたり、小学校の帰り道では友達に替え歌の合唱をさせたり、オリジナルの遊びを普及させてましたね。独りぼっちで機嫌良く遊んでいる人に興味があって、その人の面白さをどうやってみんなに見せようかと考えるのが好きだったんです。でも、そういうことを勝手にやっていると目立っちゃって、怒られる。そんなこともあり、中学受験をして個性を尊重する私立の玉川学園に入学しました。玉川学園は、絵に描いたようなお嬢様学校。歌と踊りが日常にあふれていました。手入れされた広大な芝生のキャンパス、廊下にはグラランドピアノ、教室には最新のMacがあって、イラストレーター、フォトショップ、プログラミングの授業もありました。

——そんな玉川学園から、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科（以下「先端科」）へ進むわけですね。

玉川学園では英語劇部に入っていて、舞台作品の構成や言葉を音に乗せるリズム感みたいなものを学び、高校生になった頃には少しポエジーなオリジナルのミュージカルをつくるようになっていました。すごく美人な友達を主役にして、最後にヅラが取れて「きやー!」みたいな（笑）。ほかにも近所のコンビニに白塗りしたピエロが買いに来る映像を撮ったりする、私の前衛時代の始まりですかね。

それらをポートフォリオにまとめて、先端科を受験したら現役合格。でも、ここからが試練の始まりでした。入って見たらマニアックな現代アート一色。同級生はほとんど年上で、専門用語が飛び交う会話にまったくついていけず、トイレで泣く日々でした。

——それでも、谷中のプロジェクトでやったことは学生時代の集大成ですよ。

そうです。いかなければ幼稚園時代からの集大成です。プロジェクトの企画は、これまで学んできたことや、知っていることを全部詰め込んだ感じで、あとは「どうにか社会のためになれー!」と、全力で祈るしか力がなかったともいえます。

## 発想を支えるたくさんの学び

幼稚園の頃に習った書道や日本舞踊、ヨガや和太鼓などが、表現について考える時の土台になっていると気付かされることもあります。幼稚園の遠足で行ったディズニーランドも、祖母が練習していた美空ひばりの歌も、私の表現の核になっている。今からでも十分掘り下げがいのあるものに早くから出会えていたことは、運がよいと思います。

小学校では漫画部に入ってディズニーのセル画をまねしてつくったり、シンクロナイズドスイミング（当時）を始めたのを機にクラシックバレエの基礎を学んだり、市民ミュー

ジカルへの参加を機にジャズダンスやヒップホップに夢中になりました。玉川学園での中学時代は英語劇部に入ったので歌うことや作品の構成に関心が移行し、高校生の終わり頃には受験のために始めた素描にのめり込みました。

藝大に合格してからも絵画教室に通っていたんですが、夢中になって描いて、後から客観的に自分の絵を見て、身に覚えがない感覚になる時があるんです。上手になりたいというよりは、表現の持つ不思議さに魅せられちゃったんですね。

——藝大ではどんなことを学びましたか。

先端科では、オリジナルのパフォーマンスを発表していました。最初は現代オペラの演出がなかったので、舞台上でのパフォーマンス、例えばピナ・バウシュやピーター・ブルック、ローリー・アンダーソンなどに関心を持ちました。しかし先端科全体が現代アートを教える傾向が強かったので、オノ・ヨーコなどのインスタレーション系の作品や、ボイスやマリーナ・アブラモヴィッチなどの行為性を重要視するパフォーマンス、そしてクリストや川俣正などのプロジェクトを知るにつれて、自分の意識の範囲が舞台上の空間から日常の空間へと拡張していきました。自己表現の領域を超えて、社会へのどんなアプローチをすることを仕事（work＝作品）としていきたいのか、その姿勢を問う日々でした。

また先端科は、どんな素材や道具を使って表現するのかを自由に選べたので、写真や映

像、文章や身体、プロジェクトやパフォーマンスなどさまざまな表現に挑む先生や仲間たちとの濃密な時間を過ごしていました。世代を超えて表現者たちの苦悩を分かち合ったり、一緒にグループワークをする中で、どんな素材にも共通する精神と身体の開きの仕方のようなものを感覚的に学ぶことができ、そういった経験が、どんな表現者とも一緒にプロジェクトができる精神力とマネジメント力を付けてくれたのだと思います。それが自分にとって未知の領域であっても、作家が見ようとしている風景に寄り添って、協働することができます。作家本人ですら一寸先を暗中模索するような新しい挑戦であっても。

「谷中妄想ツアー!!」で要となる、「芸術っ子」への関心が生まれたのも、この学部時代でした。「創造の今日と未来」という授業に集まった学生との出会いが、原点になっています。そこには美術専攻の学生も音楽専攻の学生もいて、非常勤講師の海藤春樹先生が「アートっぽいことを小器用にやるのではなく、もっとさらけ出して自分を解放するような表現」を論じていました。ミュージカルに関心があった私は「コーラスライン」のような仕立てで学生に発表させる海藤先生の意図をすぐに理解しました。学生の一部は、ある意味で藝大の優等生とは言い難い人たち。「アーティスト」になりたいかどうかも分からず、やりたいことを社会の文脈に沿って上手にプレゼンする力もなく、煮えきらない何かを抱えてさまよっていました。彼らは巧みな「作品」をつくることや演奏の技術力を高め

ることに追われ過ぎて、自分が感じていることや思っていることを社会に表明する機会を逸していたんです。「私には分からないけれど藝大生だからすごいんでしょね」などと言われてしまって、作品に対する素直な反応をもらえず、今を生きているリアリティーが不足していて窒息しそうにも見えました。海藤先生はそんな学生たちに興味を抱くと同時に、ある種の危機感も感じていたようです。みんなでご飯をつくって食べる会を開いてくれていました。それが芸術っ子たちが集まり始めたきっかけであり、自分たちの表現の場を諦めない練習をしていたようにも思います。その集いで親睦を深め、先端科でパフォーマンスをやっていた仲間たちと、後に出会う熊倉研究室の学生たちもコアメンバーとなり、海藤先生の意志を引き継ぐような形で、私の谷中での挑戦が始まります。

## 熊倉純子と出会い「谷中妄想ツアー!!」が生まれる

——熊倉先生との出会いは？

熊倉先生のごことは、東京藝術大学の大学院を受験しようとした時に、入学案内のパンフレットで知りました。

学部を卒業する頃に「私このままじゃ社会に出られない!」と思っていました。それま

での学びの経験があまりに強烈というか、社会から逸脱した世界を体験し過ぎていたから。とはいえ社会人になるのも、垣間見てしまった有象無象の世界が全てなかったことになってしまうようで、抵抗を感じていました。表現者としての研究を続けるのではなく、この学びをどう社会でいかしていくのかを考えたかった。日本社会の中での「アート」の在り方には違和感を持っていたので現代美術作家への憧れはなかったし、やりたいことを一通りやり終えて、社会の中での「芸術」の在り方によりやく興味を持てる状況になっていました。「藝大を卒業するのに、芸術について何も勉強しなかったな」と思って、もう少し学ぶなら、アートマネジメントについて学べる大学院に進もうと思ったんです。

熊倉先生には、本当に鍛えられました。当時の私は、面白いと思えるアートに出会えず、なりたい職業も分からず、言葉で自分の自由を守るすべもなく、大事にしてきた感覚だけを握り締めたまま涙を流しているような状態でした。熊倉先生は、黙って言葉を出せないでいる私に「どうだったらいいのかな？」と質問してくれました。その時に「そうか、今ある社会で満足できなかったら、どうだったらいいかを考えればいいんだ」と思えて、すごく気が楽になりました。それなら前向きに考えられる、自分が社会のためにしたい「仕事」を全力でやってみようと思いました。それが「谷中妄想ツアー!!」でした。

しかし、私はそれまでパフォーマンス作品のマネジメントしかしたことがなかった。そこで、表現者の創造的なエネルギーが街に浸透していくようなパブリックアートを目指しました。

熊倉先生の「経験の中でマネジメント力を付けてほしい」という考え方に魅力を感じていました。とはいっても、藝大のアートマネジメント専攻の学生を育てる現場なので、研究活動として成立していなければならない。そこに事例としての新しさが求められていました。既存の枠からはみ出ている「芸術っ子」の奇異な存在こそが新しさだと信じていたものの、学生たちがこれからのアートに対応できるマネジメント力を付け、これからの表現者と協働する現場が必要。とにかく既存のアートからはみ出してしまった目の前の表現者たちと、社会との接点をつくる企画を考える必要がありました。

「谷中妄想ツアー!!」で街中を舞台とした時に、まず作品への理解をお客さんに求めないことをベースに考えました。たとえ寝ているだけのパフォーマンスでも、根拠なく楽しめるような次元に観客を連れていきかった。反応に困るようなアートを一人で見るのは緊張してしまうので、4人1組のグループに一つの地図を共有してもらいました。4人グループはパフォーマンスを見て、それが何だったのか消化できないまま次の地点への地図が渡される。移動中も、不自然に路地でゲームをして遊ぶ大人がいたり、風変わりな格好の人が歩いていたりする。「もう、謎過ぎて笑うしかない」という状況。理解しようとす

るほどドツボにハマって、妄想が止まらなくなるといった具合。

逆にパフォーマンス側は、純粹にやりたいことをやっている。私はそれを形にするためのサポートをする。そこに、インタラクティブな要素や深読みできるような演出を加え、アートパフォーマンスになるように仕立てたんです。

それが、「芸術っ子」たちにとっての社会との接点になり、通りすがりの人も含めた「みんな」が楽しめるパブリックアートになるように。

——「芸術っ子」というのはどんな人たちですか。

なんて呼んでいいかわからない存在ながら「アート」の周りでウロウロしている人たちのことを「芸術っ子」と呼ぶことにしたんです。

公共的な場所では、事前に何をするか説明して許可をもらわなければならない。となると、自分の表現スタイルが定まっているベテランだったり、演劇や歌手のように再現可能な表現スタイルでないと難しくなってしまう。自分も自分が表現したいかどうかも分からない状態の「芸術っ子」の一人だったわけですが、その存在を言葉でくくるとしたら、暗黙の芸術イメージを背負い、誰よりも不自由になってしまっている藝大生や、新しい教育を受け、社会の中の新しい役割すらも自らつくり出さなければならず、社会的には生活保護を受けるよりも少ない年収で生きているエリート大の卒業生。こんなはずじゃなかつ

た本当のわたし像を誰かに承認してほしくてアートの付近に集まる社会人。アートのうさぐささを批判しつつも、アート付近にしかとりあえずの居場所を見いだせていない放浪者…… などでしょうか。とにかく私を面白がってくれたのも、私が面白がれたのも、彼ら「芸術っ子」でした。今でもその人たちは、やっぱり面白い。そしていまだにいい意味で全然、分らない。なんとなくなかったことになるには、あまりにもったいないぐらゐの曖昧な魅力にあふれていたんです。

## 「妄想」とは、誤読を許容するマジックワードである

——妄想という言葉はいつ出てきたのですか？

確か、熊倉先生に企画の背景を説明した時に「私の妄想かもしれないけど」と言ったら「妄想でいいんじゃない」と言われたのを覚えています。

独りで何か奇妙なことをやっている人がいても、私はそれがその人の妄想によるものとは思わない。その人の現実だと思うから。だけど、周りがそれを納得するためには「妄想」って言ってあげないと落ち着けないんじゃないかなと思った。表現者に「あなたの見ているものは妄想ですよ」なんて言えない（笑）。でもきっとそれはある意味妄想で、妄想

があるからこそ、誰も見たことのない風景が現実に見れてくるのだと思います。

「妄想」という言葉が表現者の過剰な真剣さや狂気を受け取りやすくする。そういった言葉を発明したい。相いれない人同士が同じ場所にギリギリ居られるようにするための言葉。それが私にとってのアートかもしれない。こっちからもあっちからも誤読できる魅惑的な「謎」。それを中心に人が集っている風景は、一番多様で平和的に感じます。

自分に都合よく解釈したり、勝手な勘違いで恋愛したりするのって、風景としては面白いじゃないですか。私になりたいのは「オペラの演出家」。だからどんな仕事をする時も、「みんなが楽しめるようにどうしたらいいか」って考えるんです。平和主義や事なかれ主義的な意味合いではなく、多少のイザコザがあったり、事件があったりした方が味わい深い結果になる。もちろんそれを楽しめずに苦しむ人だっているから、恨まれたり死んだりしない程度にだけ。苦しいことが許せて、再び人が人に懲りずに期待したり、時々泣ける人情劇が起きたりするのが好み。色気と食い気しかない集団が宴をしていたり、その傍らを踊り子が通り過ぎていたり、それがリズムカルにゆったりと続き続ける現実を演出したい。舞台の上だけで起きるオペラよりも現実の方がはるかに劇的だと気付いてからは、無味無臭の舞台空間に戻れなくなってしまう。少し演出掛かったリアルな出来事を、これからもつくっていきたいんです。

——「谷中妄想ツアー!!」では、鑑賞者が皆、異なる体験をする仕掛けで、誰一人として全体像が分からなくなっていますよね。加えて、通りすがりの人なのか演者なのかの見分けもつかないという……

妄想が止まらなくなるのが醍醐味。そこが重要なところです。それぞれのグループが異なるルートを通るからこそ、最終地点に全てのグループが集まった時に「一体、ほかのグループはどんな体験をしたんだろう」と思うわけです。ある参加者は芋を持ち、ある参加者はゼッケンを着け、ある参加者はつながったパンツを持って話し合っている。

「この人は、この家の人なの?」「この人は、企画の参加者なの?」どこまでが仕掛けで、どこからが街の日常なのかの見分けがつかない。頭はぐるぐる回転して、体は歩き疲れてへろへろに。気になるけれど、考えたくないぐらいの充実感を味わってもらおう。たくさん歩いて体も思考も柔軟になっていて「なんだか分からないが貴重な体験をしたことは間違いない。まあいいか」となる。それが芸術とのいい関係のような気がしたんです。

——発表のステージを「舞台から街中」に移すという難題。誰もが参加でき楽しめる場とする。それを追い求めた創作への挑戦だったことを、あらためて理解しました。

分らない過ぎると楽しめない人がいるし、簡単に分かって楽しめない人がいる。その両方が楽しめるような企画にしたかった。新たな領域に挑戦する文化事業は理解されにく

く、新しい出来事はそれまでの規範を犯しているように見えてしまうこともあります。通常、その人にとって理解を超えていることはなかなか実現させてもらえないのですが、幸いにも私が出会った谷中地域の人々やアーツカウンシル東京のメンバーは、理解を超えたものを引き取る度量を持ち合わせてくれたのだと理解しています。

——「谷中妄想ツアー!!」に出演した表現者はどうやって集めたのですか？

企画に合わせて集めたわけではありません。周りに集まっていた人たちの、それぞれにやりたいことを実現するための企画が必要でした。「どうやら近所に珍しい透明な魚（芸術っ子たち）が泳いでいるんだが、水が合わなくて酸欠になっているみたいだから、ちよつと透明な水草とかつくる？ 渡邊梨恵子（谷中のおかって代表）さん、悪いけど、谷中のおかつてのみんなに透明な魚が見えやすいような水槽をつくろうって伝えてくれない？」みたいな感じだった。見せ物にするのではなく、そのまま社会に存在させたかった。

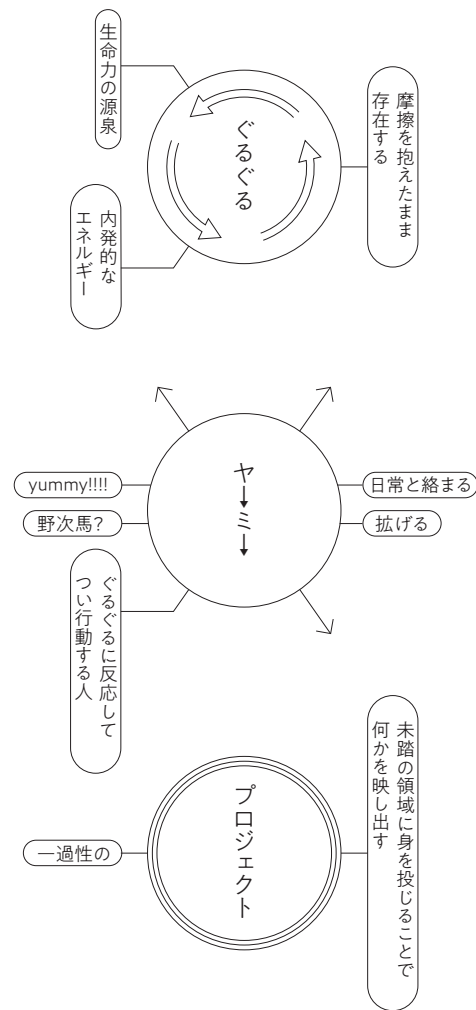
## 奇跡を生んだ呪文「ぐるぐるヤミ↓プロジェクト」

今思えば、社会に合わせてうまく書いたようなニセモノの企画書が通用しなかったのがよかった。

2008年のことかな、最初に、アートイベントの企画書的なものを書いて「art-Link 上野―谷中」の熊井千代子さんから実行委員の方々に見せに行ったんです。そしたらすごく不穏な空気になって「これはダメなんだな」と思ったのを覚えています。次に「ぐるぐるヤミ↓プロジェクト」と書いた、企画書にもなっていないような渾身のメモを持って行った時に、熊井さんが笑顔で「何これ面白そうね。ぐるぐるヤミ↓って名前がいいわ」って受け入れてくれて、「一緒にやりましょう」ってなったんです。

「ぐるぐる」と「ヤミ↓」って造語は、お風呂に入っていた時になんとなく降ってきた言葉だったんですが、最初に〈谷中のおかつて〉のメンバーに話した時も、なぜかみんな「これやろうー」って言うってくれて、正直私が一番驚きました。「これでいいの？」って。それまで何時間も話し合いをしていながら形にならなかったのに、この名前ができた途端、なんだかみんなが動き出して。

当時を振り返ると、運営メンバーには、何がしたいとはっきり言えるわけじゃないけれど何かアートなことに関わりたかったり、アートマネジメントに関心はあるけれど藝大の教授と議論できるような言葉は持っていない人たちが集まっていました。なんだか「ぐるぐる」と思考を巡らせている表現者の卵たちに、あーだこーだと関わろうとする「ヤミ↓」たちが加わって、うごめきながら紡ぎ出す風景の中を観客が通過して、その空気感を



富塚さんがまとめた、プロジェクトのコンセプト。

楽しむ共通イメージ。「アートマネジメント」ができるかどうかや、「アーティスト」として表現するかどうかという問いを離れて、自由におのおのが抱く「仕事」をする時空をひとまずつくり出すことに成功したんだと思います。

アートかどうかや、表現者かどうか、運営側かどうかなんてどうでもよくて、とにかく何か楽しいことがやりたかった人たち。それを上手かどうか他人に評価されたくなんかな

い人たち。お節介と言われようが「やらせてよ!」という人たち。あるいはその領域で働きたい、貢献したい人たちが集まっていたんだと思います。まさに、芸術的欲求の表れ。

表現者のみならず運営側の人々もエゴを超えた芸術的な領域で向き合ってくれたからこそ、その場で瑞々しく吐露される「生<sup>なま</sup>な表現者たち」の新しい器が発明されたんだと思います。それは、その時代にも場所にも、目の前の鑑賞者にも呼応するあまり固定化した形を持たない。専門的な知識と技術に加えて膨大な手間と時間を要する、アートならではのマネジメントを学び合える現場でした。

そもそもは学部を卒業した時に「自分がつくりたいのはアートじゃなくて文化だな」って、ふと思ったの。「文化」はどうやってつくるんだろうか、縄文文化なんかはどうやって始まったのかと思考を巡らせていて「人が集まるだけでいろいろ起きちゃうから、みんなで生きていくために文化が必要になったんじゃないかな。じゃあ、人を集めればおのずと必要な文化が発明されていくんじゃないか」って考えたのが全ての始まり。とにかく「集めよう」ということに関心が変わったわけです。

当時、私も住んでいた千駄木に同級生が住んでいて、その集合住宅の「文化レジデンス」という名前も、隣に小さな公園があるのもすごくいいから「ここをみんなが集まる場にさせてくれない?」と頼んだら、「いない時だったらいいよ」と言ってくれたので、あ

るじがない時間は看板を掛けて、みんなで集まる場所にしていたんです。

毎日のように友達を呼んで、お茶をしていました。訪れた友達も最初は「何で呼ばれたんだろう？」的な顔をするんですが、その顔には反応せずに、心の中で文化の始まりを目撃すべく観察を続けました。大学院が終わる頃には「みんなで何かしようよ」と誰からともなく話が出るようになって。「やりたかったことをやってから終わろう！」なんて、普通は高校生の最後にやるやつですよ（笑）。そこで一人ひとりに「本当に自由に何でもやっていいとしたら何したい？」と聞いていったんです。そしたら「階段で昼寝したい」とか「セーラー服着てマイケル・ジャクソンの踊りを夢中で練習したい」とか言いだす。

「そんなことしなかったのかあ」と驚きました。なんでも自由にやれる発表空間より、人が生活している公共的な空間での表現欲求なのかなと思って。そういった、ささやかにもある夢の方が本音な気がしたし、案外かなわぬ夢なのかもしれないと思って「よし、みんなで力を合わせてお互いの夢、かなえよう！」みたいな気分になったんです。それを同時多発的にやったというか、街の中にアートの拠点を点在させる熊倉先生の構想とを重ね合わせてできあがったのが「谷中妄想ツアー!!」でした。コミュニケーションの中で掘り当てた、ささやかだけど性根につながっている本当の「望み」が、日常の風景にちりばめられました。

# ——「ぐるぐるヤミミプロジェクト」に終わりはあるんですか？

「ぐるぐるヤミミプロジェクト」は2009年に〈谷中のおかって〉が実施したアートイベントの名称でしたが、同時に、私にとつての文化創造拠点をつくる実践的なプロジェクトでした。当時は想像していなかったほどに発展して、今ではそれが仕事になってきている。東京藝大のキャリア支援室の教員として、芸術っ子たちのサポートを続けられているし、京都市京セラ美術館のラーニング・プログラム担当として、文化を支える拠点づくりを実践するチャンス을いただけています。当時は「どんなに大きな目標を掲げても一人で社会なんて動かせないから、いっそ思い切って全力でやろう！」と思っていました。こんなに真面目にやるはずじゃなかったのに、たくさんの方がサポートしてくれたので、経験を積むことができています。今でも全力で芸術環境をつくろうと努めています。

現在は、コロナ禍でオンラインでの「集い」が増えている状況ですが、未知のものとコミュニケーションをとりたいかと思える状態に心があるかどうか、いつの時代も重要だと私は信じています。だから、コロナ禍になってすぐにリモート版の「こども創作教室」を構想しました。かつて「芸術っ子」だったアーティストたちが、謎のキットを各家庭に届け、開催日にオンライン上で待ち合わせ、そのキットを使って一緒に遊ぶ時間です。最初はこのこどもが家の中でも伸び伸びできるようなアトリエの時間をつくりたいという思いだけ

でしたが、回を重ねるうちに、その日が家族みんなで遊ぶ時間になっていたり、参加者のこどもがファシリテーターになって集まった親戚の子たちの面倒を見ていたりするように、コロナ禍であるうがなかるうが、魅力的な体験ができる場を「芸術っ子」たちとつくり続けることが、想像を超えた未来を呼び込むことになるかと確信しました。人々が堂々と個々の違いを分かち合いながら、創造性をもって自分たちの文化を醸成していけるように、これからも目的に縛られない魅力的な「集い」を社会の荒波と戯れながらつくっていききたいと思っています。

### 3人のキーパーソンにインタビュー

## アートマネジメントの現場と 人材を育成した教育者

### 熊倉純子

東京藝術大学の熊倉純子研究室に在籍していた学生と、有志の人々との活動から始まった〈谷中のおかって〉。

アートマネジメントの人材育成に、長年尽力してきた熊倉純子教授に、教育者の視点で〈谷中のおかって〉誕生までの流れや社会とアートの新たな関係づくりについての考えを語ってもらった。

くまくら・すみこ

公益社団法人企業メセナ協議会勤務を経て、全国32地域でトヨタ自動車のアートマネジメント講座を開催（1996－2004年）。東京藝術大学音楽環境創造科に着任後、藝大と市民と取手市の三者共同アートプロジェクト「取手アートプロジェクト」のインターン制度「TAP塾」塾長を務める（2004－06年）。アーツカウンシル東京との共催事業などでもアートマネジメントの専門人材を育成。2016年より東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授。



# 社会と芸術をつなぐ

## アートマネジメント

——〈谷中のおかつて〉代表の渡邊梨恵子さんは人材育成事業TAP塾の卒業生ですし、当時の「取手アートプロジェクト」のことからお聞かせください。

### 「藝大のため」のアートプロジェクト

「取手アートプロジェクト（Toride Art Project、以下「TAP」）」は、1999年に10年目を迎えた東京藝術大学取手校地に先端芸術表現科が新設されたことから、取手市役所の全面的バックアップのもと、先端科と市民組織「取手アートプロジェクト実行委員会」の共催で、第1回目が実施されました。

TAPは、今やアートプロジェクトを名乗った老舗ですが、「TAP」と命名したのは、アーティストで当時先端科の教授だった川俣正。彼には明確なビジョンがあり、そのコン

セプトが先端科のホームページに書かれていたのを読み、非常に感銘を受けました。その時から「つくり手と受け手の境目がなくなって、行ったり来たりできるような場所」をアートプロジェクトと呼ぶことにしたのです。

——2回目の「家・郊外住宅」は取手の街中の廃屋そのものを作品化する大掛かりな仕掛けで、実行委員長を務める川俣さんらしいアートプロジェクトでした。

ほんと面白かったね。あれだけのものを出現させる瞬発力がすごかった。2000年はまだ企業メセナ協議会に勤務していて、送られてきたカタログにある「穴を開けた家」「フオトジェニツクな家」「うさぎのぬいぐるみの影があるガラス窓」に魅入りながら、あらためて「アートプロジェクトって何だろう」と考えた。あのことがなかったら、藝大の先生になっていなかったと思うぐらいに。とはいえ、確信的に「アートプロジェクトをやるう！」と思ったわけじゃないし、それを目的に取手に行ったわけじゃない。でも結果的に手を染めることになった。

——かくして、熊倉さんはアートマネジメントに注力していくことになるわけですが、ご自身としてはアートプロジェクトの現場とどのように関わっていたのが教えてください。初めて取手に入ったのは2001年の12月かな。私はメセナ協議会に勤めながら武蔵野美術大学で教えていた時で、学生を3年目のTAPに連れて行った。作品を見た後に、T

A P事務局の打ち上げに参加させてもらったら、市民ボランティアの大人たちがすごく盛り上がっている感じはよくて、ちょっとだけうらやましく思いましたね。

—— そんなTAPに東京藝大の教員の立場で関わることになりますね。

音楽学部 of 音楽環境創造科（以下「音環科」）立ち上げ時の教員として2002年に就任しました。美術学部の先端科が主導するTAPに引き込まれたのが2003年。「アートプロジェクト概論」という授業まで用意されて。そんなある日、東京藝大側の責任者としてTAPを回していた渡辺好明先生にTAPの運営会議に連れて行かれたら、運営に参加している大人たちが仲悪くしている状態。連れて行った学生は、帰り道「二度と行きたくないね」と話すほどでした。と同時に「学生に自分たちの仕事を取られる」と思われたのか、最初から関わっていた大人たちとの溝は深まるばかりで、なかなか可愛がってくれませんでした。それでも、「おじさんたちがアーティスト気取りで予算を使っているのを、おばちゃんたちは面白く思っていない」といったたぐいの、教員が絶対に聞けないような話を学生たちは聞いてきて、それは面白かったですね。逆に、音環科の学生に聞いてみると「裏側主婦のおばちゃんたちがやっていて泥くさいのに、表向きのデザインは全て先端科の子たちがやっているから嘘くさい」と言うので、「じゃあ現実を表すメディアをつくって見たら？」とハッパを掛けたら「TAPがたっぷり」という、振り切ったものを出し

てきた。それがまたおばちゃんたちの癪に障り、学生いわく「目も合わせてくれなく」なっちゃいました。

でも実際のところ、先端科ができた時に鳴り物入りで全教員が関わって始めた事業だし、先端科の学生が必修でプロポージアルを出す「藝大の藝大による藝大のための取手アートプロジェクト」でした。

## 「市民参加型」のプロジェクトに！

2003年のTAPには先端科の先生はもう誰もいませんでした。関わっていたのは川俣正ほか世界的に活躍しているアーティストばかりだから、取手でばかりやり続けられるわけがない。責めるつもりはないんだけど、半ば市民が置き去りになっていた。おばちゃんたちは「やめられても困るのよ」という感じ。彼女たちのライフワークになっていると実感しました。

渡辺先生から「どんどん好きにやってください」と、まるっと全権委任的に託されたこともあり、それなら外から若者をいろいろ呼んで、いろいろしちゃおうと思ったわけね。研究室の学生だけでは圧倒的に人手が足りないし、モチベーションも湧かないだろうし、

必修の学生とおばちゃんたちの対立の構図が続くのも不毛かなと思って。森さんと一緒にやっていた「トヨタ・アートマネジメント講座（TAM）」が終わる頃だったから、その延長線上の次のプロジェクトとして一緒にやろうとTAPに森さんを誘い、現場を担う仲間を増やそうと、アートマネジメントを学べる実践講座の体で「TAP塾」として募ったら50人ぐらいの応募がありました。50人分の仕事をつくらないといけなくなったというのが、TAPの市民参加型プロジェクトの事の始まりでした。

——2004年から始めた市民参加型アートプロジェクトの運営には、具体的なイメージは明確にあったのですか。

ありましたね。市民ボランティアの人たちにゲストのアーティストをマネジメントしてもらい、学生に、公募した若手作家を任せるようにしました。それまでは、有名アーティストは藝大の先生がアテンドし、若手作家を市民ボランティアに押し付けていたから、よくないと思っていました。2004年に招聘した小山田徹さんや椿昇さんは、自分たちで現場のマネジメントができるアーティストでした。そこで市民ボランティアの方々には、彼らに付いてもらうように役割を入れ替えました。このことでアーティストと市民がすごく仲良くなった。椿さんが「RADIKAL CARBON」という竹炭を焼くプロジェクトを実施する場所を求めたところ、市民ボランティアのとりなしで市長の田んぼを借りられること

になる。けれど市長に電話する暇が椿さんにはない。仲良くなった市民ボランティアが連絡係を担う。当然、市民のシビックプライドも上がる、というわけです。

椿さんや小山田さんが関わっている時点で、本格的なアートプロジェクトなのですが、翌2005年に旧茨城県学生寮の建物とその前に広がる原っぱを大胆に使う「はらっぱ経由で、逢いましょう。」を実施し、2006年には市内にある下水終末処理場ほかを使った「二人前のいたずら―仕掛けられた取手」へと、市民ボランティアがアートプロジェクトとがつり組むところまで持つていくことができましたね。

——市民参加型アートプロジェクトの担い手育成の一翼となったTAP塾におけるアートマネジメント人材の育成がどのようなものであったか、熊倉さんの視点でお聞かせください。

TAP塾のインターン生たちには、「定石」をすごく教えました。2005―06年をやった後、若者たちがキラキラ考えるには、むしろ定石を知らない方がいいのかもしれないと思ったほどに。それはそれで意味があったと思うし、だから皆さん今、活躍していらっしやると思います。

当時でも割と毎日、放課後にTAPの実施本部へ行っては現場を見ていたつもりですが、そんな私が仮にTAPディレクターになったら、完全に自分でやらないと気が済まなくな

る。でも、学部の教授として音環科の立ち上げですごく大変だったし、TAPのディレクターを専業でやることはできないし、全てを見ていられない状況でもあったし、それをしてたら私がつぶれちゃうって思ったわけです。けれど学生を必修の授業として関わらせていたから、それ相応の責任はある。その上で、私が見えていない所で良くも悪くも動く余白がないと、つまらないという感覚もあったし、現場の判断で動いてもらうしかどうにもならないと考えたわけです。

現場のディレクターやプロデューサーをやるのは初めてだから、森さんにしてもらったけれど、二人だけで現場をやるわけでもない。ということ、取手では取手なりの実験をやって、見事にそれが花開いたのが2006年。アートマネジメント教育の究極の現場。塾生もいろいろな所から集まってくれて、音環科の学生が萎縮するぐらいでした。

私と森さんが考えたら15分ぐらいで決まることも、TAP塾のインターンとは8時間ぐらいかけて話し合っていました。それももろみがあったわけではない。でも見事に、形のないところからインターンたちと話し合った結果、それもアートプロジェクトという概念がなかった時(2006年)に、「これは単なる展覧会ではない」という意識でアーティストたちと向き合っていて、すごいことになったなと思いました。面白いことがインターンと街の人との間でどんどん起こっていた。教えていないようなことがちゃんと哲学的、

理念的に機能していた。現場が勝手に面白いことをして、でもそれが全体の理念に寄与することがベストよね。

単に1から10まで気が済むようには目は配れないという現実的のところから、自分でやれば15分で済む申請書を書く作業も、インターンが自分自身の言葉で書けるまで、朝まで付き合いました。でもそれは面白かった。40倍ぐらいの時間と手間をかけてみんながその気になってくれたら、初体験のインターンのみんなが目覚ましい働きをしてくれた。

記録に残っていないけれど、実は歴史に残る現場だったと思います。

——TAP塾の総決算のようなプロジェクトを展開する頃、2006年の9月に足立区の招聘しょうへいを受けて音環科の校地が取手から千住に移りますね。

2006年度後期から移転し、その後のTAPはどうしようかと考えました。取手市は最初1千万円ぐらいの予算を出していました。最初は小さく、可能性があれば大きくする民間の発想と違って、行政は最初は言われるまま出し、予算を減らしていく。スタッフも減る。

それまでの総決算のようなプロジェクトが終わって、取手の現場にちよつと傍観者のようになった頃かな。千住への移転もあったし、森さんに「一度、TAPを渡辺先生にお返ししたら」とアドバイスされたこともあって、いったん「取手」から離脱しました。

——「千住移転後に何をやるのか」を考え始めるわけですね。

いや、当時はTAPでやり切って少し疲れていたもので、ほかから何か話があるまで、こちらからやることはないと思っていた。もうちょっとなんの後ろ盾もない、文化政策とかに関係のない、ゼロから自由に今の若者の発想で何かをしなくちゃとも考えていましたね。〈谷中のおかつて〉の誕生には、千住校地への移転ではなく、2006年当時に、私が台東区のアドバイザーに就任したことが大きく関係します。台東区のアートアドバイザーになって、台東区だから谷中でやろうということになった。藝大が上野にあることは関係なくて、台東区との関係で「谷中」の活動は始まった。台東区がアートアドバイザー制度をつくりたいという話でした。

その会議で「社会と芸術が絡まって、何か新しい作用を生み出す取り組みがあっちこちでされている」という話をしたら、みんな面白がって、やりましょうという話になった。どこでやるかってなり、台東区といえば「art-Link上野―谷中」の熊井芳孝十千代子さん。お二人は上野界わいのプロジェクト主宰者として有名な方で、一緒にやることになりました。2007年に、東京国立博物館の茶室でアートアドバイザー展、「art-Link上野―谷中」、研究室の学生たちと考えた「音ストリート」を台東区芸術支援制度パイロットプログラムとして実施したのが、「谷中」での活動の始まりです。

## 谷中のおかつて発足！

——それが〈谷中のおかつて〉誕生前夜ですね。そして「谷中妄想ツアー!!」のもとになるガイドツアーを2008年に実施するわけですね。

2008年は「art-Link上野―谷中」の会期に合わせて、熊井さんにガレージを借りて、手弁当（ゼロ予算）でインフォメーションセンター&「アートよろず相談所」を〈谷中のおかつて〉でやりました。水やオレンジジュースやガイドツアーを売って、商品よりも形のないものの方がお金が取れるんだって分かったのも面白かった。その時に私が持っていた資源は、経験のない若者たちという人的資本、藝大生とTAP塾生でした。

自分で自分のやってきたことと違うことをやりたいタイプなので、谷中ではあまり定石を押し付けない方法を試してみたかった。教育的に考えたというよりも、私自身が見たことのないものを見たかった。市と大学みたいな構図が基盤にあると、「定石」の中から、今の時代においての最先端・最良の策を選んで提案しなければならない。けれどそういうのを抜きに「定石、それ何？」みたいなのをやりたかった。とにかく、アートなんだから見たことのない景色を見たい。

私が考える最先端じゃない最先端を学生が勝手にやらないかなと思っていたら、学部生

も院生も、TAPから有志で集まってくれたみんなが、マネジメントの定石を覆すことをしてくれた。私の研究室に飛び込んでくれた富塚さんもそうだったし、既にいた学生たちも触発されていました。

——「谷中妄想ツアー!!」は熊倉さんには、どのように見えていたのでしょうか。

正直、追いついていなかった。というのは、富塚さんが「谷中妄想ツアー!!」の企画を持って来た時、訳が分からなくて。

「もうちょっと名の知れたアーティストを入れないとね」みたいなことを思わず言うと、富塚さんがすごく困惑してしまったので話し合っていたら、そういうものではないと分かりました。しかし、「谷中妄想ツアー!!」は、いわゆる芸術祭とはまったく違うもので「ツアー!!」はツアーの進化系だとか言うので、訳が分からなかった。

それでも、富塚さんを指導しながら、私の知っている「定石」とかけ離れたところで発想していることがだんだんと分かってきた。「藝大が150年かけて築き上げてきた定石によってがんじがらめにされて、卒業後に自由になれないアーティストを自由にする」って私は理解したけれどその話に実感は湧かず、意味も分からなかった。

でも、すごくワクワクしたし、「定石」に縛られずにやろうとしているのだから、すごく大きなことだと思ったし、面白そうと思ったわけね。藝大が長年つくってきた型じやな

いものがやりたかったから、お手並み拝見と思いました。

富塚さんをはたから見ていると、特にディレクションでもないのだけれど、デリケートなファシリテーション力があり、集まっていた表現者たちをすごくボトムアップして、みんなをチアアップしていく。ずっとそんなんだから、ギリギリまで何が出てくるかは分からない。でもそれがすごく芸術的醍醐味だいごみのある現場になっていく。

「定石」に慣れている私としては、常時イラつき7割。残り3割ぐらいで「いかん、いかん。このイラつきの向こうには、何か分からないけれど、きっと価値があるに違いないと信じなければ、こんなものに付き合えない」と、自分に言い聞かせているぐらいのすごい葛藤でした。けれど同時に、私を「これは何をしようとしているの?」って、ファンタジーなところで自問自答させてくれる。

藝大を卒業して何をやっていいのか分からない人たちが、あんな方法で社会化していくとは誰も思わないよね? (笑)。これをやらないと社会化できないというのは想定外だったので、本当にびっくりしたけれど、それまでの嫌なことが全部吹っ飛ぶぐらいにかく面白かった。

——アートマネジメントの人材育成に、どのようなものが必要とお考えですか。

文化政策は、本当は文化の生態系をつくらなきゃいけない。それにはまずアーティスト

の生態を理解しなければなりません、アーティストの生態を無視して社会の役に立たせようと思うと、無理が生じて失敗します。アートプロジェクトがまだない当時のアートマネジメントは、文化施設や文化イベントのノウハウでしかなく、そこになんの未来もないことは分かっていました。底が薄いイベントのノウハウを教えてもしょうがない。何が問題なのか、もっと自分たちで考えて、それに対する解答をユニークな方法で出した方がいいに決まっています。

それを割と大胆に具現化してくれたのが富塚さんでした。そこに渡邊さんという心あるサポートが加わる。渡邊さんのやり方も、いつも定石通りではないなと思わせてくれるけれど、えも言われぬ仕組みができて、今はそれが伝統になって活動が継続できているから面白いですね。

——最後に、取手・谷中・千住のプロジェクトは、熊倉さんの中でどのような関係になっているのでしょうか。

もう一回「看板」を背負い、アートプロジェクトという名前を持った新しい定石を足立区でやる勇気をもらえたのは、「谷中」があったから。やにわに「取手」から「千住」に來たという感覚はなくて、明確に間に「谷中」がある。谷中は谷中で、谷中らしさを持って、自分たちが感じる課題や「面白い」に正直でいてほしいと思っています。それに対し

て千住のプロジェクトは、行政と組んで、社会システムと対峙しながらどう市民と協働するかに挑んでいて「アートプロジェクトというものの新しいモデルをつくらなくては」という、すごく大きな大義を背負ってやっている。私の中では両者は対極で、まったく違う。千住はマネジメントの定石もやるし、新しいことにもチャレンジしていく社会実験なんだけど、谷中は芸術実験。芸術家たちが社会にどう向き合いたいのか、あまり社会の側からいろいろ言われないで、とりあえず試してみるみたいな場所。谷中は社会というのが脇にあることも知りながら、小さな街にある特別なカフェのような存在でいた方がいいなとは思っています。

7 「アートアクセスあだち音まち千住の縁」。足立区、アーツカウンシル東京、東京藝大などの共催で2011年に開始した大規模な市民参加型アートプロジェクト。

※ 「ネットTAM…アートマネジメント総合情報サイト」でも、熊倉純子教授による記事「アートプロジェクト始め」が紹介されている。

# 谷中の土壌

《谷中のおかって》が立ち上がった東京都台東区の谷中は、  
下町情緒あふれる街。

その歴史を江戸時代までさかのぼってみると  
アートを育み続けてきた特別な土壌であったことが見えてくる。  
規格外で不思議なアートプロジェクトを許容してくれる器は  
既につくられていた。

この街には、今でもたくさんのギャラリーが点在し、  
地域資源を守っていくためのプロジェクトが行われている。

100歳を超えても現役の彫刻家として活躍していたという、平櫛田中の旧居兼アトリエは、台東区のNPOや東京藝術大学の有志などによって、建物の修繕や掃除、展覧会やイベントなどの施設活用がなされている。谷中のおかっては毎月「田中邸を味わう日」（第4日曜日、NPO法人たいとう歴史都市研究会と一般社団法人谷中のおかってによる建物内部の見学やお掃除体験）を開催。



## 谷中の歴史

江戸の安泰を祈願するため、江戸城の鬼門となる上野の台地に寛永寺が創建されたのは1625（寛永2）年。寛永寺ができてから周辺にもたくさんのお寺がつけられ、江戸時代から地場産業としてアートを育む礎がつけられていたという。

「谷中は江戸時代から芸術を育んできました。江戸時代には、職人たちがぞうげやベッコウ細工などをつくり、大工や石工、絵師、銅細工師らがお寺に仕事を納めていました。明治には画家や彫刻家が集まっていました」

谷中の歴史を解説してくれたのは、2019年、アーツカウンシル東京の講座「アートプロジェクトが立ち上がる土壌とは」でゲストにお招きしたNPO法人という歴史都市研究会の椎原晶子理事長<sup>8</sup>。

1887（明治20）年には東京藝術大学の前身となる東京美術学校が開校したことから、谷中界わいには岡倉天心、平櫛田中、横山大観、狩野芳崖、下村観山、朝倉文夫など近代日本美術界の大家たちゆかりの場所が残っている。岡倉天心は1898（明治31）年に日本美術院を創設。日本美術院の中心メンバーであった横山大観ら8人と、その家族が住んでいたという。そして彫刻家の平櫛田中は、横山大観らの支援を受ける形で上野桜木にアート

リエを設け、敷地内に家族と暮らすための住居も建てている。

明治以降も下宿や銭湯、食堂、額縁店や絵筆を売る店、美術運送業者などアーティストを支える地場産業が盛んな谷中は「地場産アート」を育む街となり、若いアーティストの生活を支える場となっていた。谷中の古い店や家々には、家賃を安くしてもらおうお礼に描かれたという肖像画や、ご飯代として置いていかれた作品などが残されているという。谷中には、大成するか否か分からない若いアーティストたちを慈しみ、育ててきたという土壌がある。

8 東京藝術大学大学院修了。1989年よりまちづくりグループ「谷中学校」運営人。2001年、有志でNPO法人という歴史都市研究会設立。明治・大正・昭和の建物を住まいや店舗、アート活動の拠点としてまちに開きつなぐ。

## アートプロジェクトを受け入れる温情の街

そんな谷中の地に、藝大生や社会人スタッフらが〈谷中のおかって〉を立ち上げたのは2008年。当時、「art-Link 上野ー谷中」が上野・谷中エリアのギャラリーや美術館、飲食店など多彩な芸術関連スポットを紹介するマップを作成して無料配布していた。

谷中はアートプロジェクトが盛んに行われてきた街だ。椎原さんらが運営する「谷中学校」のメンバーが街中で展覧会を始めたのが1993年。以降「芸工展」として毎年開催され、伝統工芸の職人、作家や若いアーティストたちが、谷中を舞台として同時期の展覧会を開催してきた。1997年には「art-Link 上野―谷中」が上野と谷中、根津、千駄木を結ぶエリアで現代アートのイベントをスタート。以来、このアートプロジェクトは、上野・谷中エリアの商店主や美術館、ギャラリーのスタッフで構成され、2007年度には台東区芸術文化支援制度のモデル事業として、参加ギャラリーや路地などのさまざまな場所で開催やイベントを行っている。

そうしたアートのイベントが小さくまざまに、街のあちこちで展開される中で発足したのが、〈谷中のおかつて〉だった。2008年、おかつてはart-Linkのボランティアスタッフとして運営を手伝うところから始まり、インフォメーションデスク「アートよろず相談所」を開設。art-Linkのメンバーと協働することで、地域の人々との関わり方や自主運営するアートプロジェクトの運営の仕方などを学んだ。そして2009年の「谷中妄想ツアー!!」の誕生をきっかけに東京都、アーツカウンシル東京との共催事業を始め、2010年に根津駅から徒歩すぐの狭い一軒家を最初の公開拠点とした。はす向かいには昔ながらの八百屋があり、隣には洗練されたおしゃれな女性が一人で営む美容院があった。間口が

狭く奥行きのあるごく小さな一軒家で、路地からも中をのぞくことができ、引き戸を開けると部屋の奥まで全て見えるような拠点だが、「芸術っ子」が出入りしたり、ご近所さんが子どもを預けに來たりと、人の出入りが絶えないオープンな拠点となった。

おかつてが谷中で2009年に開催した最初の「谷中妄想ツアー!!」は、どんなパフォーマンスが何をするのかも分からない摩訶不思議な企画だった。地域住民がまだ作品化されていないものへの理解を示してくれたのは、新しいことに挑戦しようとする人々を応援し、支え合ってきた歴史があったからこそといえる。

時代時代に未知と向き合う芸術家たちを育んできた、谷中という場所。そこに暮らす地域の人々の、時に厳しく時に温かなまなざしに〈谷中のおかつて〉もまた5年、10年と見守られてきた。

## つなぐ

近年、お散歩エリアとして注目されているように、谷中の街並みには古い建造物が多く、たくさんさんのギャラリーが点在している。この情緒ある寺町の町内会や商店街に加え、自発的に集まった〈谷中のおかつて〉のようなアート系団体、福祉・子育て支援団体なども合



2008年に上野桜木の車庫を間借りして art-Link の会期中にツアー&サービスデスク「谷中のおかって」を開設する。



最初の拠点「はっち」は、根津駅から徒歩すぐの狭い一軒家。1階は客間、2階は倉庫と作業場だった。



2012年に引っ越したおかっての拠点「木はっち」は、「はっち」よりも広いスペースを確保。

わせると50〜60団体が活動し、地域資源を守っていくプロジェクトも盛んに行われている。前述の彫刻家・平櫛田中の邸宅は一時は空き家となったが、2004年以降は東京藝大を中心に行われた「サステイナブル・アートプロジェクト」に活用されるなど、これまでに数々の団体が修復・再生に携わってきた。平櫛田中の孫に当たる平櫛弘子さんからの要望もあって、限られた団体やアーティストの占有スペースにするのではなく、いろいろな人が芸術を体験できる場所にしようと、日常的で創造的な場所としての用途が模索されていた。しかし運営費用もなく、なかなか公開できない日が多かったため、熊倉純子教授を介して、この建物に惚れ込んでいた富塚が声を掛けたのだ。

おかってはまず、たいとう歴史都市研究会の有志メンバーが行う建物保存活用のための掃除の手伝いを始めた。そして、旧平櫛田中邸の運営を考える「でんちゅうず」を発足し、建物の魅力を体験できる公開日「田中邸を味わう日」や、若手芸術家のアトリエでの制作と発表を支援する「DenchuLab. (デンチュウラボ)」などが実施されるようになった。

次の世代のアーティストを見いだし、育もうとする土壌は、受け継がれている。



## 〈谷中のおかつて〉立ち上げ期からの活動拠点

## 活動のきろく

2008年の立ち上げ、翌々年の法人化を経て  
自主企画だけでなく  
幅広い活動を行ってきた〈谷中のおかって〉。

2020年に、こども創作教室「ぐるぐるミックス」が  
リモート開催に移行するまでの  
12年間の歩みを記す。

2015年に開催したピクニック形式のパフォーマンス公演「威風DoDo」。おかってとアーツカウンシル東京が主催。一般公募による出演者、若手パフォーマー／アーティスト、地域住民ら総勢100人程度が汐入タワー周辺に集まった。

## 〈谷中のおかって〉活動のきろく

### ◆主催事業

- ◎東京文化発信プロジェクト室／アーツカウンシル東京との共催事業
- ◎東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業（ASTT）
- ◇その他（地域の方々からの依頼案件など）



立ち上げ期は区民館を借りて企画会議を行っていた。



アートよろず相談初案件でフラワーズが呼び込みパフォーマンス。／続・続展



前年に続き2009年もお手伝い。／続・続・続展



後のおかってメンバー・大西健太郎。／谷中ドレッシング



路上に現れるパフォーマー。／谷中妄想ツアー!!～茶会～



拠点「はっち」で開催されていた月曜私塾。

### 2008年 手弁当で立ち上げ

アートよろず相談所を開設し、谷中でアートプロジェクトを先駆けていた「art-link上野―谷中」のインフォメーションセンターを請け負う。まだ拠点がなく、企画会議は個人宅や区民館を借りて行っていた。

- ◆ツアー&サービスデスク「谷中のおかって」
- ◆ガイドツアー「谷中散歩」
- ◇「続・続展」をサポート
- ◇「art-link上野―谷中」のインフォメーションセンター

### 2009年 ぐるヤミプロジェクト始動

東京文化発信プロジェクト室との共催事業「学生とアーティストによるアート交流プログラム」の一環で「ぐるぐるヤミ↓プロジェクト」実施。「谷中妄想ツアー!!」が誕生する。

- ◎参加型パフォーマンス「谷中妄想ツアー!!」
- ◎柳家喬太郎×田中泯公演「鬼背参り」
- ◎ライブイベント「LOVE! LIVE」
- ◎レクチャーイベント谷中放談「アートのお仕事」
- ◇「続・続・続展」をサポート
- ◇大西健太郎インスタレーション「谷中ドレッシング」

### 2010年 〈谷中のおかって〉法人化

東京アートポイント計画の一環として、東京都、東京文化発信プロジェクト室との共催事業「ぐるぐるヤミ↓プロジェクト」を実施。拠点「はっち」を開き、木方幹人さんの「月曜私塾」がスタート。この年から、こども創作教室の構想も始まる。

- ◎拠点「はっち」…アートよろず相談・月曜私塾その他
- ◎参加型パフォーマンスツアー「谷中妄想ツアー!!茶会」
- ◎きむらとしろうじんじん「野点」@谷中公園
- ◆交流イベント「おしゃれパーティー」
- ◇「続・続・続・続展」をサポート

・「東京文化発信プロジェクト」開始

・「東京アートポイント計画」開始



架空の「どーぞじん」たちが田中邸で楽器演奏などを披露し、参加者をもてなした。  
／2013、どーぞじんのいえ



東北でじんじんの野点を開催。  
／2012、大槌駅前にて



おまわりさんをゲストに迎えて開催した、こども創作教室。  
／ぐるぐるミックス

## 2011年 こども創作教室が本格始動

こども創作教室の体験会を実施し、5月より通年教室とする。  
旧平櫛田中邸でのお掃除会がスタートし、「月曜私塾」は木方邸で行われるように。

- ◎拠点「はっち」…アートよろず相談・月曜私塾その他
- ◎こども創作教室「ぐるぐるミックス」
- ◎きむらとしろうじんじん「野点」@根津・谷中（計4カ所）
- ◎参加型パフォーマンスツアー「谷中妄想ツアー!! おしゃれ」
- ◎散歩ツアー「谷中妄想カフェ」
- ◆「田中邸を味わう日」
- ◆交流イベント「おしゃれパーティー」

## 2012年 旧平櫛田中邸を文化創造拠点に

おかつての拠点を上野桜木「木はっち」に移転。谷中の歴史建築である旧平櫛田中邸を活用し、文化拠点を形成する試みの一環で「どーぞじんのいえ」を構想。

- ◎拠点「木はっち」…アートよろず相談・月曜私塾その他
- ◎こども創作教室「ぐるぐるミックス」
- ◎散歩ツアー「谷中妄想カフェ」
- ◎きむらとしろうじんじん「野点」@岩手県大槌町（計3カ所）
- ◆「田中邸を味わう日」

## 2013年 「どーぞじんのいえ」実施

これまでの地域との関係や「芸術っ子」とのネットワークなどをいかし、旧平櫛田中邸を舞台としたパフォーマンス公演を実現。「谷中妄想ツアー!!」の手法を用いた。

- ◎こども創作教室「ぐるぐるミックス」
- ◎ホームパーティー形式パフォーマンス公演「どーぞじんのいえ」
- ◎参加型パフォーマンスツアー「谷中妄想ツアー!! 告白」
- ◆きむらとしろうじんじん「野点」@谷中
- ◆「田中邸を味わう日」
- ◆こどもアトリエ「くるくるミックス」
- ◆散歩ツアー「谷中妄想カフェ」
- ◆きむらとしろうじんじん「野点」@岩手県釜石市・大槌町（計2カ所）
- ◆ぬり絵・創作ワークショップ「ぬりぬりの会」

主催…よみせ通り商栄会

・Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業／ASTT）開始

・「アーツカウンシル東京」設置



田中邸にて、おかって会議の様子。/2014



こども創作教室のプログラム開発に、地元の親子が参加する姿も見られる。/ 2015、風と遊びの研究所



谷中の街をリサーチする滞在アーティストたち（右）とワークショップ（左）の様子 / 2016、DenchuLab.



山谷のNPO団体と共同で路上イベントを開催。/ 2016、バラエティロードSANYA

## 2014年 自立運営に向けた準備期間

東京文化発信プロジェクト室との共催を「ぐるぐるミックス」のみとし、自立運営に向けての準備を始める。

◎ こども創作教室「ぐるぐるミックス」

◆「田中邸を味わう日」

◆若手アーティスト支援企画「DenchuLab.」

◆散歩ツアー「谷中妄想カフェ」

●きむらとしろうじんじん「野点」@岩手県釜石市・大槌町（計2カ所）

◆富塚絵美・大西健太郎ラトビアでパフォーマンズ

◆サプライズパーティー「アルミホイルクリスマス」

◆体をゆるめるワークショップ「ぶらぶらの会」

## 2015年 ファシリテーター育成プログラム開始

アーツカウンシル東京の単年助成プログラム支援を受け「ぐるぐるミックス」を運営。遊びの開発やファシリテーターの育成を目的として「風と遊びの研究所」を開始。

◆ワークショップ・ファシリテーター講座「風と遊びの研究所」

◆こども創作教室「ぐるぐるミックス」

◆こどもアトリエ「くるくるミックス」

◆「田中邸を味わう日」

◆きむらとしろうじんじん「野点」@台東区清川

## 2016年 東北など谷中以外のエリアへ

きむらとしろうじんじん「野点」に続いて、こども創作教室は自主運営を開始し、東北での開催もスタート。前年から山谷のNPO団体とも共同イベントを行い、谷中以外のエリアへ活動が広がる。

◆ゼロからのアートマネジメント実践講座「チヨリ塾」

◆ワークショップ・ファシリテーター講座「風と遊びの研究所」

◆こども創作教室「ぐるぐるミックス」

◆「ぐるぐるミックスthe オープンデー」

◆「田中邸を味わう日」

◆若手アーティスト支援企画「DenchuLab.」

◆路上の祭典「バラエティロードSANYA」

●「くるぐるミックス」@釜石

◆パフォーマンズ「山本家アルミ婚」

◆きむらとしろうじんじん「野点」@大槌 主催：市民有志

・アーツカウンシル東京と東京文化発信プロジェクト室が組織統合。  
・「TURN」プロジェクト開始

・上野「文化の杜」発足



TAP (=Toride Art Project) の20周年パーティーでパフォーマンス。  
／ 2019



地域住民が田中邸に集まった新年会。／  
2019



こども創作教室（通年開催）  
よりも対象年齢を広げ、  
旧平櫛田中邸を舞台に開  
催。／ 2017、ぐるぐるミ  
ックス the オープンデー

## 2017年 恒例イベントが充実

旧平櫛田中邸を拠点として開催してきた主催事業のプログラムが  
年々充実し、恒例化するイベントも増える。

- ◆ゼロからのアートマネジメント実践講座「チヨリ塾」
- ◆ワークショップ・ファシリテーター講座「風と遊びの研究所」
- ◆こども創作教室「ぐるぐるミックス」
- ◆「ぐるぐるミックスthe オープンデー」
- ◆「田中邸を味わう日」
- ◆若手アーティスト支援企画「Denchulab.J」
- ◆路上の祭典「バラエティロードSANYA」
- 「ぐるぐるミックス3缶石」
- ◆きむらとしろうじんじん「野点」@岩手県大槌町 主催・市民有志
- ◇ワークショップ「みーらいの春」主催…上野文化の杜新構想実行委員会

## 2018年 おかって10周年を迎える

富塚と渡邊が上野文化の杜のプログラムオフィサーとなり、活  
動範囲を上野公園へと広げる。「art・Link上野―谷中」のメンバ  
ーとUENOYESで再び協働する。

- ◆ゼロからのアートマネジメント実践講座「チヨリ塾」
- ◆ワークショップ・ファシリテーター講座「風と遊びの研究所」

## 2019年 東北での活動が実を結ぶ

「ぐるぐるミックス」を続けてきた釜石市で、市民ホールから  
招聘されてプログラムを実施。こども園では自主的な取り組み  
が始まる。

- ◆こども創作教室「ぐるぐるミックス」
- ◆「ぐるぐるミックスthe オープンデー」
- ◆「田中邸を味わう日」
- ◆路上の祭典「バラエティロードSANYA」
- 「ぐるぐるミックス3缶石」

- ◆こども創作教室「ぐるぐるミックス」
- ◆「ぐるぐるミックスthe オープンデー」
- ◆「田中邸を味わう日」
- ◆若手アーティスト支援企画「Denchulab.J」
- ◆路上の祭典「バラエティロードSANYA」
- 「ぐるぐるミックス3缶石」
- ◇SANYA ARTS TIME EXHIBITION 主催…東日本旅客鉄道株式会社
- ◆きむらとしろうじんじん「野点」@岩手県大槌町 主催…釜石市民ホ  
ール

- ◇「ぐるぐるミックス」@共生保育園
- ◇UNEX旧博物館動物園駅「アナウサギを追いかけて」、谷中  
解放区「柏湯通り」 主催…上野文化の杜新構想実行委員会



岩手県釜石市の市民ホールで開催された「ぐるぐるミックス」。

- ◇「ぐるぐるミックス in TETTO」 主催：釜石市民ホール
- ◇「MATCH FLAG PROJECT 2019」
- ◇きむらとしろうじんじん「野点」@岩手県大槌町主催・市民有志
- ◇「ぐるぐるミックス」@共生保育園
- ◇JENOVES 小沢剛「タイニイハウスアートセンター」主催・上野文化の杜新構想実行委員会

## 2020年 「ぐるぐるミックス」をリモート版に

こども創作教室「ぐるぐるミックス」がコロナ禍でリモート開催となる。2016年から東北で開催してきた「かまいしこども園」とも、リモート形式でプログラム開発を続けている。

- ◆こども創作教室「ぐるぐるミックス」※リモート形式で開催
- ◆路上の祭典「バラエティロードSANYA」※リモート形式 & リアルのハイブリッド開催
- ◆「田中邸を味わう日」
- 「ぐるぐるミックス in 釜石」※リモート形式で開催

## コロナ禍での新たな試み

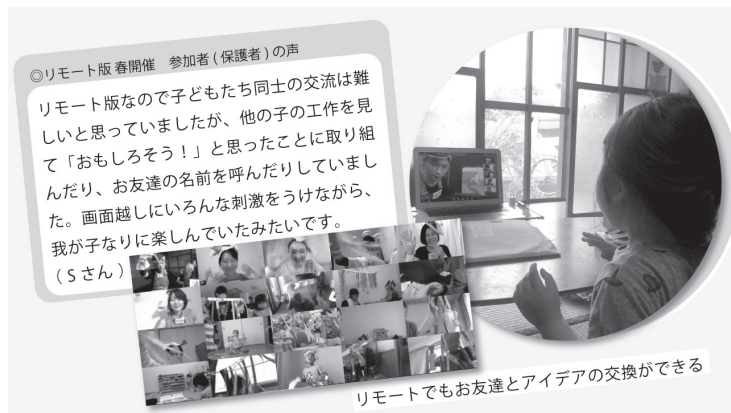
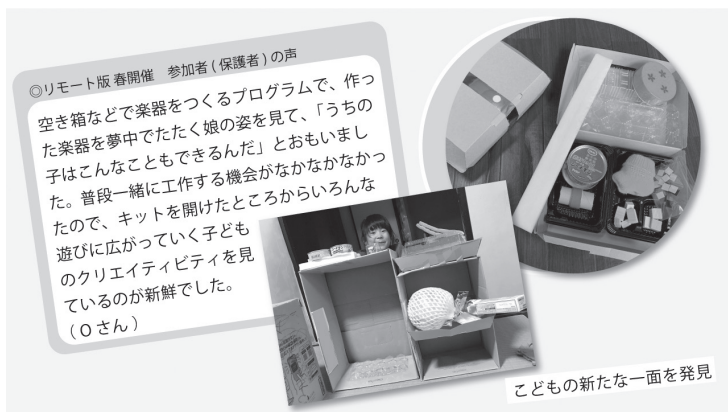
〈谷中のおかって〉が、こども創作教室「ぐるぐるミックス」を構想し始めたのは2010年。翌年には通年プログラムを開始している。公的な支援を受けて成り立っていた事業を、自立運営に向けてかじを切ったのは2014年度から。以降、参加費の値上げを行うも、多くの参加申し込みを得ていた。

また、近年は講師の人材育成も始めている。創作教室のファシリテーターを育てるとともに、アーティストの特性をいかしたプログラムを開発するための研究の場として「風と遊びの研究所」を立ち上げる(2015年)。地元の谷中だけでなく、2016年には岩手県釜石市の「かまいしこども園」でも「ぐるぐるミックス」を開き、この活動は現在まで続けている。

そうした中で迎えた、新型コロナウイルスの感染拡大により2019年度最後の教室が開催できない状況となり、代替案として講師のアーティストが創作キットをこどもたちに届け、遊び方を配信するという形で様子を見ることに。3月に入っても感染の拡大は続いている状況の中、既に2020年度(5月から開催)の申し込み枠も埋まっていたが、新たにリモート版の開催を検討することになる。



事前に創作キットが届き、開催当日は講師のアーティストと一緒に作品をつくって遊ぶという仕組み。



子どもたちと一緒にリモート版を体験した保護者の声。

アンケートを実施したところ、リモート版の開催を希望する回答が多く得られたことから、配信ではなく相互にコミュニケーションができるリモート形式での創作教室を本格始動させた。

余儀なくされたリモート開催であったが、それまで、通常の教室では4〜5歳としていた年齢制限をリモート版では外し、幼児から高齢者まで幅広い世代に参加対象を広げることができた。きょうだいや親戚などの家族も一緒に楽しむことができるようになり、家で過ごす日常の中に、アトリエの時間ができるという成果がもたらされた。また、リモート版を機に音楽を活用した新たなプログラム開発にも力を入れている。

コロナ禍にあつて、アートを介した新しいコミュニケーションの可能性も見えてきている。



## あとがき

2009年、熊倉門下生とその仲間たちによる「谷中妄想ツアー!!」に遭遇した。プロジェクトとして達成感のあるその現場は、私を知る手法とはまったく異なるパフォーマティブなものであった。

写真からではあの場合にあった「気配」を呼び覚ますことは難しい。形のない一過性の情景は、立ち会えた者の記憶にしか残せていない。しかも「ツアー!!」は、複数のプログラムが並行して進行的なため、誰にとっても断片でしかない。プロジェクトの全貌は、クリエーションの構想として把握するほかない。「ツアー!!」を成立させた手法をきちんと捉えたいがために共催した東京アートポイント計画での3年間の活動は、冊子『ぐるぐるヤミ↓プロジェクト』（2014年発行）にまとめられ、谷中流アートマネジメントが生み出した「プログラムとレシピ」も記載されている。既に冊子があるにもかかわらず3人にインタビューを行ったのは「誰が何を考え、どういうふうに事を進めたか」、その言葉を残しておく必要性を意識してのことだ。インタビューを構成する過程で、自身が記憶していた体験も言葉となり身体化されていた。

実現できた要因、たどったプロセス、その他与件も理解して、各人の歩みをより合わせていくと、個人の背後にある社会的動向が重なって見えてくる。アートプロジェクトへの知見と経験を持つマネジメント組だけでなく、表現者やボランティアスタッフたちも、い

わゆる造形芸術から自由になったアートプロジェクトを前提として共有するネイティブ世代という事実だ。

「ツアー!!」は参加型と地域型を合わせたハイブリッドなアートプロジェクトとして、演劇やパフォーマンスの演出技法を巧みに使いながらも、その様式に回収されずに、あえて最後まで造形されきらない状態で街に放ち、参加者も鑑賞者も楽しめる居場所を街中に出現させた。富塚と渡邊は、そのような非合理と過剰な対話からなるプロセスを「イメージする世界を編み出すための最高に能率のいい手法だった」と断言した。求める情景を成立させるための、谷中流アートマネジメントへの自認だ。本書の副題とした「非合理で過剰」にも見えるプロセスは、新しい領域でのクリエーションと真摯に向き合う時に必要な事柄であることを、あらためて思い返すことができた。

マネジメントは事故につながるリスクを回避しつつ、効率のいい手順で事を進めていくのを目指とする。しかし何かを新しくクリエーションする場合は、特有の緊張感を帯びる。そのドギマギもアートプロジェクトに関わる醍醐味だいごみの一つだ。しかし、時にマネジメントの手法から入ってしまうと、実験的な余白の少ない、常識的で日常的なものになってしまう。既存のマネジメントのセオリーに飽き足りなくなった大人たちは、意図的に摩擦を前提とする（谷中のおかって）に現場を預けたといえるだろう。

プロジェクトを成立させるアートマネジメントの手法は一樣ではない。アートが求めるありさまに、応答するマネジメント手法が必要となる。コロナ禍に限らず、常に変容するものと認識すべきなのだ。パンデミック下での行動変容を求められている今こそ、当然のように新たな手法に挑戦する彼女たちの言葉は、アートマネジメントについて考える際の一助になるだろう。

最後になりましたが、この本の発行に関し、快くインタビューに応じていただきました熊倉純子さんのご厚誼にまずは感謝いたします。

代表の渡邊さんと総合プロデューサー富塚さんと共に〈谷中のおかって〉の活動に関わってこられた皆さまのご協力・ご尽力に対し、心からお礼を申しあげます。

アーツカウンシル東京 森司

# 谷中流アートマネジメント

—非合理で過剰—

2021(令和3)年3月25日

監 修 森 司 (アーツカウンシル東京)

制作協力 一般社団法人 谷中のおかって

編 集 aTs 企画所 西内 亜都子

デザイン HONDESIGN

発 行 元 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京  
〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目1-28  
九段ファーストプレイス8階  
TEL 03-6256-8430 FAX 03-6256-8827  
<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

印刷・製本 株式会社 渋谷文泉閣

※本冊子はTokyo Art Research Lab 研究・開発  
「流通・発信プログラム」の一環として制作されました。

*tarl*  
TOKYO ART  
RESEARCH LAB

ISBN978-4-909894-15-1 C0070



文化でつながる。未来とつながる。

*Tokyo.Tokyo*  
FESTIVAL